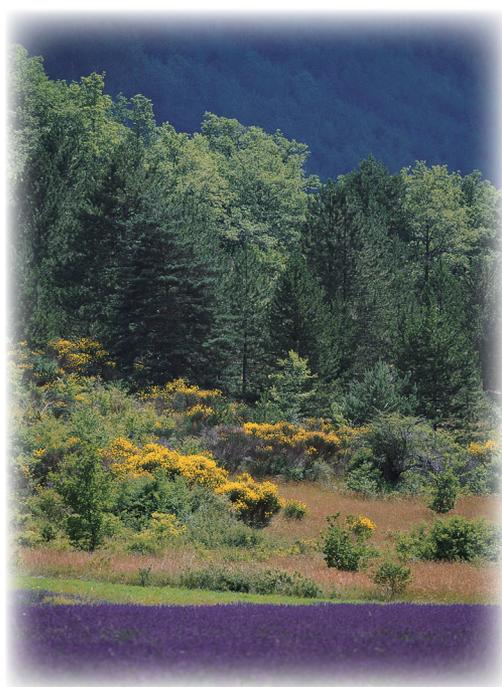


永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2012年 11月

「イエスのうちにあるがままの真理（1）」 「ただ恵みによってのみ」 「分離」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「イエスのうちにあるがままの真理 (I)」 4

朝のマナ

「ただ恵みによってのみ」 7
神の驚くべき恵み

現代の真理

「分離」 39
最後の出来事

力を得るための食事

「チャプチェ：韓国風はるさめ」 48

お話コーナー

「女の子と奇跡」 50

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX：0494-26-5059

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖繩集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>
メール：support@4angels.jp

発行日 2012年10月31日
編集&発行 SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: istock on front cover;
Comstock on page 39

決して罪がよみがえらない

罪のための贖罪としてのキリストの犠牲は、他のすべての真理がそのまわりに連なっている大真理である。(福音宣伝者 315)

それ〔十字架〕は、十字架を受け入れる人々のための、あふれるばかりの永遠の重い栄光がかかっている中心的な支柱である。不朽の支柱であるキリストの十字架の下やまわりでは、罪がよみがえることも、過ちが支配権を得ることも決してない。(手紙 124, 1900 年)

罪のための贖罪としてのキリストの犠牲は、他のすべての真理がそのまわりに連なっている大真理である。正しく理解し、感謝するためには、神のみ言葉にあるすべての真理を創世記から黙示録までカルバリーの十字架からほとぼしる光のうちに、また救い主の贖罪という驚くべき中心的な真理とのつながりにおいて研究しなければならない。贖い主の驚くべき犠牲を研究する人々は、恵みと知識に成長する。

わたしはあなたの前に、憐れみと再生、救いと贖いの大いなる大記念碑—カルバリーの十字架にあげられた神の御子—を提示する。これがすべての説教の主題となるべきである。

イエスは、ご自分の聖霊によって、老若の心をご自身に招き、引き寄せておられる。……十字架につけられたキリストが宣布されるとき、福音の力が信じる者に及ぼす感化力によって明らかに示される。罪過と罪のうちに死んだままでの代わりに、彼は目覚めさせられる。

カルバリーの人を高く、もっと高くあげなさい。キリストの十字架を高めることに力がある。(神のむすこ娘たち 221)

わたしたちの罪を負われる神聖なお方キリスト

イエスのうちにあるがままの真理 (I)

➤ 自分のひとり子を罪人のために死に渡されたことによって、神は比類のない愛を墮落した人類に表された。わたしたちは「神は愛である」(ヨハネ第一 4:8) と述べている聖書を完全に信じる信仰を持っている。それでいながら、多くの人々は不面目にこのみ言葉をゆがめ、この意味を取り違えているために危険な誤謬に陥ってきた。神の聖なる律法はわたしたちが聖なる愛情を正しく評価できる唯一の標準である。もしわたしたちが神の律法を自分たちの標準として受け入れないならば、わたしたちは自分自身の標準を打ち立てる。神はわたしたちにご自分の尊い愛の約束を賜ったが、エホバの優しさを、罪を見過ごし、悪を見逃されるように導くものとみなすべきではない。

創造主はご自分の被造物を愛されるが、義よりも罪を、また真理よりも誤謬を愛する人は、わたしたちの世に苦悩をもたらした不法を永続化させており、したがって真理の神に恩寵をもって見られることはない。真理と義の道は十字架を伴う。多くの人々は神のご要求を誤って解釈し、それらを自分たちの良心を悩ませず、また自分たちの仕事の関係において不都合を生じないようにする。しかし、真理こそ唯一の聖化させる媒介なのである。

イエスのうちに表されている神の愛は、神のご品性について真実な概念へと導く。わたしたちが自分たちの罪のために刺し通されたキリストを眺めるとき、神の律法を破りながら、このお方の恩寵のうちにとどまり続けることはできないことを悟る。わたしたちは罪人としてキリストの功績をしっかりとつかみ、罪を犯すことを止めなければならないことを感じる。そのとき、わたしたちは神へと近づく。わたしたちが神の愛の正しい見解を持つとただちに、その愛を悪用する気にはならなくなる。

キリストの十字架は神の律法の不朽性に対して、すなわち神がわたしたちの罪ゆえにご自分のひとり子を死に渡されるほど、わたしたちを愛して下さったことを証する。しかし、キリストは律法を滅ぼすためではなく、成就するために来られたのである。神の道徳的標準の一点一画も、墮落した状態の人類に見合うように変更することはできないのであった。イエスは悔い改める罪人にご自身の義を帰し、人間が律法を守ることを可能とするために死なれた。

神の愛は無限であるが、なお罪人は神の御子の恥と譴責と不名誉と死を伴う

贖いの計画を通してでなければ許され得ない。この事実こそ、このお方の死が神の律法への服従に終わりを告げたという聖化を主張する多くの人々によって提言されている考えを、道理のわかる思いから追放すべきである。わたしたちは日々キリストの学校で贖いの大計画を学ばなければならない。わたしたちが学ぶことをやめるとき、わたしたちはキリストの学校の生徒ではなくなる。しかし、もしわたしたちが神聖なご主人の下にいる学生であるならば、わたしたちの理解力は開かれ、神の律法から驚くべきことを学ぶのである。

主のみ前に気をつけて歩もう。どれほどしばしばわたしたちは自分たちの誓いを破り、最高の決意を損なってきたか、どれほどしばしば大いなる光を目の当たりにしながら、神に背を向け自分たちの偶像を求めたかを考えよう。わたしたちが自らを力強い神のみ手の下に低くすることは大いにふさわしいことである。

クリスチャン経験における成熟

わたしたちにとって、考えるべき以上に自分自身を高く評価するのはごく自然なことである。しかし、わたしたちが自らのありのままの現実を知ることがどれほどつらいことであっても、神がわたしたちをご覧になるように、わたしたちにわたしたち自身を表して下さるよう祈るべきである。しかし、自分たち自身を明らかにして下さるよう求めたときに、そこで止めてしまうべきではない。わたしたちはイエスが罪を許す救い主としてわたしたちに表されるように祈るべきである。イエスがあるまに見るとき、わたしたちがことごとく満ちみちたキリストで満たされることができるよう、自己を取り除いていただきたいとの真剣な願いが心のうちに呼び覚まされるのである。これがわたしたちの経験となる時、わたしたちは互いに善をなし、信心に到達するためには手の届くあらゆる手段を用いるようになる。わたしたちは肉と霊のあらゆる汚れから自分たちの魂を清め、神を畏れて聖潔を完成させなければならない。

聖なる神の愛は驚くべき原則であって、それはわたしたちの恩恵期間と試験の間、わたしたちのために全天を感動させるほどのものである。しかし、わたしたちの恩恵期間の後、もしわたしたちが神の律法の違反者であることがわかるなら、愛の神は復讐の実行者であられることがわかるであろう。神は罪と妥協なさない。不従順な者は罰せられる。神の怒りはキリストが不法者の代わりにカルバリー上の十字架にかけられたときに、ご自分の愛する御子の上へ下った。神の愛は今、悔い改めをもってキリストの許へ来る最も低く恥ずべき罪人をいなくために延ばされている。それは罪人を従順で忠実な神の子に変えるために差し出されている。しかし、もし魂が罪のうちにい続けるならば、一人として救われることはできない。

罪は律法の違反である。そして、いま救うために力強いみ腕は、違反者が聖なる寛容の限界を越えるときには、罰するのに強くなる。命を求めることを拒み、自分の習慣において責められることがないように何が真理であるかを知らうとして聖書を探らない者は、思いの盲目とサタンの欺瞞のままに取り残されることになる。悔い改める従順な者たちが、神の愛によって守られるのと同じ程度に、悔い改めない不従順な者は自分自身の無知と心の頑なさの結果に取り残される。なぜなら、自分たちの救となるべき真理に対する愛を受けられないからである。

キリストを公言しながら、決して成熟したクリスチャンにならない人が多くいる。彼らは人類が墮落していること、その機能が弱められていること、道徳的な偉業にふさわしくないことを認めるが、キリストがあらゆる重荷、あらゆる苦しみ、あらゆる自己否定を担って下さったのであり、自分たちは喜んでそれをこのお方に負っていただくのだと言う。彼らは自分たちには信じる以外何もすることがないのだと言う。しかし、キリストは、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われた(マタイ 16:24)。

イエスは神の戒めを守られた。パリサイ人たちはこのお方が安息日に人を完璧に健康にされたがゆえに第四条を破っていると宣言した。しかし、イエスは告発するパリサイ人たちに向かってお尋ねになった。「『あなたがたに聞くが、安息日に善を行うのと悪を行うのと、命を救うのと殺すのと、どちらがよいか』。そして彼ら一同を見まわして、その人に『手を伸ばしなさい』と言われた。そのとおりにすると、その手は元どおりになった。そこで彼らは激しく怒って、イエスをどうかしてやろうと、互に話し合いをはじめた(ルカ 6:9～11)。

この奇跡は、パリサイ人たちにイエスが神の御子であられることを確信させる代わりに、彼らを怒りで満たした。なぜなら、奇跡を目撃した多くの人々が神に栄光を帰したからである。イエスは安息日に行われたご自分の憐れみのみわざは律法にかなっていると宣言なさった。パリサイ人たちは律法にかなっていないと宣言した。わたしたちはどちらを信じるのであろうか。キリストは「わたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおる」と言われた(ヨハネ 15:10)。そうであれば、わたしたちにとってキリストの道に従い、戒めを守ることが確かに安全である。神はイエスと共に協力し、恐れおののいて自分自身の救いを達成するために絶えず働かせるべき能力をお授けになった。なぜなら、わたしたちのうちに働きかけて、その願いを起こさせかつ実現に至らせることは神のよしとされるところだからである。

セレクテッド・メッセージ 1巻 311-314

神の驚くべき恵み

God's Amazing Grace



11月 「ただ恵みによってのみ」

報酬か、賜物か

「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。」(ローマ 6:23)

初め、人はすぐれた能力と調和の取れた精神を与えられていた。かれはまた人として完全で神と調和し、思想も純潔で、きよい目的をもっていた。けれども、神に背いたためその能力は悪に向けられ、愛は利己心とかわってしまった。罪のため人の性質はすっかり弱められて、自分の力では悪の勢力と戦うことができなくなった。こうして悪魔のとりことなってしまったので、もし、神が特別に救ってくださらなかったならば、いつまでもそのままの状態ではいたはずである。悪魔は、人類を創造なさった神のご計画を妨害し、この世を悲しみと破壊で満たそうと思った。(キリストへの道 13)

わたしたちは、生れながら神に遠ざかっている。聖霊はわたしたちの状態を次のように言っている。「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」(エペソ 2:1)、「その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで完全なところがなく」(イザヤ書 1:5.6) と。わたしたちは全く「悪魔に捕えられて」(テモテ第二 2:26) かれの思いのままに、しっかりととりこにされているのである。神はわたしたちをいやし、解放しようと望んでおいでになる。しかし、これには全き改革、つまりわたしたちの性質を全く新しくしなければならないため、わたしたちは自らを完全に神に明け渡さなければならない。

自己との戦いは最も大きな戦いである。自己に打ち勝ち、神のみ心に全く従うには戦いを通らねばならない。しかし神に服従しなければ、魂が聖化されることはできないのである。……

神は決して造られた者の意志を強いたりなさらない。真心より、自らよく理解したうえで服従でなければ、神は受け入れることがおできにならない。単なる強制的服従は知性や品性の真の発達を妨げるものであって、人をひとつの機械人形にしてしまう。創造主はこのようなことをお望みにならない。神は創造の極致である人間が最高の発達を遂げることをお望みになる。神はわたしたちの前に最高の祝福をおかれ、恵みによってわたしたちをそこまで導こうとなさる。またわたしたちのうちにかれのみ心を行うことができるように、おのれを神にささげよとすすめる。罪のきずなから放たれて、神の子としての栄えある自由を味わうか否かは、わたしたちの選択いかんにかかっている。(同上 53～55)

代価を考える

「しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。」(ピリピ 3:7)

一生を神に奉仕して、重荷を負う者となるために、モーセは未来の王位を拒絶し、パウロは祖国で富と名誉をうけられるその有利な立場を放棄した。多くの人々にはこれらの人物の一生は自己放棄と犠牲の一生にみえるであろう。だがはたしてそうであったろうか。

モーセは、パロの宮殿と君主の地位を提供された。しかし、そのはなやかな宮廷の中には、人々に神を忘れさせる罪の享楽があった。モーセは、それよりもむしろ、「永続的な宝と正義」(箴言 8:18)をえらんだ。彼は、エジプトの偉大さに身をしばられるよりは神の御目的に自分の一生を結びつけることを選んだ。彼は、エジプトの法律を定める代わりに、神の導きをうけて、世界のために律法を制定した。彼は、家庭にとっても社会にとっても防壁となる原則、また諸国民の繁栄の礎石となる原則を人類に与えるために神の器となった。それは人類の政治における最上のもののいっさいの基礎として、世界の最もすぐれた人々から今日も認められている原則である。

エジプトの偉大さは滅び、その権力と文明は過ぎ去った。しかし、モーセの業績は決して滅びることなく、彼が自らの生活に実行した正義の大原則は永遠に不滅である。……

荒野のさすらいにも、変貌の山の上でも、天上の宮廷にあっても、彼は常にキリストと共にあった。彼の一生は、地上にあっては、自分にとっても他人にとっても祝福となり、天上にあっては栄誉を与えられる一生であった。

パウロもまた多くの働きにおいて主のご臨在というささえの力によってささえられた。彼はこう言っている、「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができ。」(ピリピ 4:13) ……パウロの一生の働きが、世界にどんな成果を与えたかを、だれが測り知ることができるであろうか。苦しみを和らげ、悲しみを慰め、悪を押え、生活を我欲と肉欲から高めて、これを永遠の生命の希望によって輝かしいものにするなどそうしたすべての恩恵の感化は、神の子の祝福をたずさえて、アジアからヨーロッパの海岸まで、人知れぬ旅をつづけて働いたパウロとその共労者たちに、どれだけ負うところが大きいであろう。

このように、祝福の感化を人々に及ぼすために神の器となることは、どんなにか価値のある人生であろう。そしてまた、このような人生の働きの成果を永遠の天国において目にみることは、どんなにか価値のあることであろう。(教育 66～68)

見て、生きよ

「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:14, 15)

青銅のへび〔民数記 21:4～9〕を掲げたことは、イスラエルに重大な教訓を教えるためであった。彼らは、その致命傷から自分を救うことができなかった。ただ神だけが彼らをいやすことがおできであった。しかし、彼らには、神がお備えになった方法に、信仰を表明することが要求された。生きるためには、見なければならなかった。神が、お受けになったのは彼らの信仰であった。そして、へびを見ることによって彼らの信仰が表わされた。へびそのものにはなんの力もなく、それがキリストの象徴であったことを、彼らは知っていた。こうして、キリストの功績に信仰をいさぐ必要が彼らに示された。これまで多くの者が神にささげものを携えてきて、それで自分たちの罪の贖いを十分にたと考えていた。彼らは、やがて来られる贖い主に頼らなかつた。こうしたささげものは贖い主の象徴に過ぎなかつた。彼らのささげものは、ただそれだけでは、青銅のへび以上に何の力も功績もないもので、それは、へびと同様に、偉大な罪祭であられるキリストに、彼らの心を向けるためだけのものであることを、主は、ここに教えようとなさつた。……

イスラエルの人々は、上げられたへびを見ることによって救われた。こうしてながめたことは、信仰を意味していた。彼らは神の言葉を信じ、神が彼らの回復のためにお備えになった方法に信頼したから、生きたのである。そのように、罪人は、キリストを仰ぎ見て生きることができる。罪人は、贖罪の犠牲を信じる信仰によって許しを受ける。命のない動かないへびとは違って、キリストは悔い改める罪人をいやす力と功績を、ご自身のうちに持つておられる。

罪人は、自分自身を救うことはできない。しかし、救いを得るためには、彼のなすべきことがある。「わたしに来る者を決して拒みはしない」とキリストは言われる(ヨハネ 6:37)。われわれは、彼のところに来なければならない。そして、罪を悔い改めるときに、キリストはわれわれを受け入れ、ゆるしてくださることを信じなければならない。信仰は、神の賜物である。しかし、信仰を働かせる力は、われわれに与えられている。信仰は神の恵みとあわれみの招待を、魂が把握する手である。……

イエスは、約束なさつた。イエスは、彼に来るすべての者をお救いになる。いやしを受けるべき幾百万の人々が、イエスのあわれみの招きを拒んだとしても、イエスの功績に頼る者は、ひとりも滅びることはない。(人類のあけぼの下巻 33～36)

サタンが無力な時

「主は心の砕けた者に近く、たましいの悔いぐずおれた者を救われる。」(詩編 34:18)

サタンは人々が神に赦しと恵みを求めるならば、それが与えられることを知っている。であるから、サタンは彼らの前にその罪を示して、失望させようとする。彼は神に従おうとする者に対して、常に苦情を言う機会をねらっている。彼は、彼らの最善で最も満足すべき奉仕でさえも、腐敗したもののように見せようとする。彼は、最も狡猾で最も残酷な様々の策略によって、彼らを罪に定めようと努めるのである。

人間は自分だけの力では、敵の告発に対処することができない。彼は罪に汚れた衣をまとって、罪を告白しながら、神の前に立っているのである。しかし、彼らの助け主であられるイエスが、悔い改めと信仰によってその魂を彼にゆだねたすべての者のために、力ある嘆願をして下さる。イエスは彼らの訴えを述べ、カルバリーでの大いなるいさおしによって、告発者を打ち破られるのである。神の律法に対するイエスの完全な服従が、天においても地においても、いっさいの権威を彼に与えた。そして彼は、罪深い人間のためにあわれみと和解を、天の父にお求めになる。彼は神の民を責める者に向かって言われる。「サタンよ、主はあなたを責めるのだ。この人々は、わたしの血によって買い取った、火の中から取り出した燃えさしである」。そして信仰をもってイエスに信頼する者に、彼は「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」という確証をお与えになるのである(ゼカリヤ書 3:4)。

キリストの義の衣を着たものは、みな彼の前に選ばれ、忠実で真実なものとして立つのである。サタンは彼らを、救い主の手から奪い去る力がない。キリストは、忍耐と信仰をもって保護を仰ぎ求める者が、ひとりでも敵の権力下に陥ることをお許しにならない。彼は次のように約束しておられる。「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」(イザヤ書 27:5)。「あなたがもし、……わたしの務を守るならば、……ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる」というヨシュアに与えられた約束は、すべての者に与えられている(ゼカリヤ書 3:7)。神の天使は、この世界においてさえ、彼らの両側を歩く。そして彼らは、ついには、神のみ座を取りまく天使たちの中に立つのである。(国と指導者下巻 192, 193)

飢え渴く者のために

「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。」(マタイ 5:6)

あなたが、あなたの要求を待っている恵みと力の豊かな供給を思い描くことができるよのだが。義に飢え渴いている人たちは飽き足りるようになる。わたしたちは必要としているすべての祝福を神に求めるにあたって、もっと大きな信仰を働かせなくてはならない。(教会への証 5 卷 17)

神への祈りによって得た力は、思慮深さと配慮へと思いを訓練する個々人の努力と結びつくと、その人を日ごとの義務へ準備させ、どの状況下、試練であっても精神を平安に保たせる。わたしたちが日々さらされる誘惑には祈りが必要である。わたしたちは信仰を通して、神の力によって守っていただくことができるために、心の願いが絶えず黙祷のうちに、助けを、光を、力を、知識を求めて上っていくべきである。しかし思想と祈りは、熱心で忠実な時間の活用にとって代わることはできない。働きと祈りがどちらもクリスチャン品性を完全にするにあたって要求される。

わたしたちは二重の生活—思考と行為、黙祷と熱心な働き—の生活を送らなければならない。……神はわたしたちに、すべての人に知られ、読まれる生きた手紙であるようにと要求なさる。日ごとの熱心な祈りによって強さと支えと力を求めて神に頼る魂には、気高い向上心、真理と義務のはっきりとした知覚力、行為の高尚な目的、絶え間ない義への飢え渴きがある。(同上 4 卷 459, 460)

人間の弱さを自覚し、人がどこで自己過信のうちに失敗するかを知ろう。そのときわたしたちは、神がわたしたちに望んでおられる純潔で気高く聖化された者になりたいとの願いに満たされるようになる。わたしたちはキリストの義に飢え渴く。神のようであることが魂の唯一の願いとなる。これがエノクの心を満たした願いである。そしてわたしたちは彼が神と共に歩んだことを読む。彼は目的をもって神のご品性を研究した。彼は自分自身の方針を目立たせたり、自分自身の意志を主張したりはしなかった。……彼は自らを神のかたちに一致させるよう努力した。(SDA バイブル・コメント [E.G. 柯什・コメント] 1 卷 1087)

欠点や落胆への言い訳はない。天来の恵みの約束はみな義に飢え渴く者のためだからである。飢え渴きによって表わされている願いの熱心さは、熱望した必需品は与えられるという堅い約束である。(教会への証 7 卷 213)

一心に

「あなたがたはわたしを尋ね求めて、わたしに会う。もしあなたがたが一心にわたしを尋ね求めるならば」(エレミヤ 29:13)

多くの者が真の土台を持たないで想像上の希望に寄りかかっている。泉が清められていないので、その泉から流れている流れはきよくない。泉をきよめなさい。そうすれば流れはきよくなる。もし心が正しければあなたの言葉、あなたの衣服、あなたの行いはすべて正しい。真の信心が欠けている。わたしが不注意で軽薄で祈らない人をクリスチャンであると認めるなら、これほどわたしの主人であるお方を辱めることはない。否、クリスチャンは自分の弱みに、自分の感情に打ち勝つ。罪に病む魂のために治療法がある。その治療法はイエスのうちにある。尊い救い主!このお方の恵みは最も弱い者のためにも十分であり、最も強い者もお方の恵みを持たなければならない、さもなければ滅んでしまう。

わたしはこの恵みをどのように得ることができるかを知った。あなたの密室へ行き、一人でそこで次のように嘆願しなさい、「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」と。熱心で真剣でありなさい。熱烈な祈りは非常に役立つ。ヤコブのように祈りのうちに格闘しなさい。苦闘しなさい。イエスは園で大粒の血の汗をしたたせられた。あなたは努力しなければならない。あなたが神にあつて強いと感じるまで密室を離れてはならない。そして見張りなさい。あなたが見張り祈っている限り、あなたはこれらの悪の包囲を抑え、神の恵みがあなたのうちに現われることができる。

神はわたしがあなたに警告するのを止めることをお許しにならない。若い友よ、あなたの全心を込めて主を求めなさい。熱心に来なさい。そして神の助けがなければ滅んでしまうと心から感じ、鹿が谷川の水を慕いあえぐように、あなたがこのお方を慕いあえぐなら、主はあなたをすみやかに力づけ、そのときあなたの平安は人知ではとうてい測り知ることはできない。もしあなたが救いを期待するなら、あなたは祈らなければならない。神の御霊の実があなたの内に宿ることができるように、あなたの内に完全な改革をしてくださるよう、神に請い願いなさい。……神の御霊の深い感動を享受するのはすべてのクリスチャンにとって特権である。かぐわしい天来の平安は思い全体に浸透するので、あなたは神と天とを瞑想することを愛するであろう。あなたはその御言の光栄あるみ約束をふんだんに味わうことであろう。しかし、まずあなたはクリスチャンの道のりを始めたことを知りなさい。永遠の命への道のりの最初の数歩を進めたことを知りなさい。(教会への証 1 巻 158, 159)

「あなたがた自身から出たものではなく」

「あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。」(エペソ 2:8)

使徒は、自分が手紙を書いている人々が、自分たちの生活のうちに、キリストの変える恵みによって成し遂げられた輝かしい変化を表わさなければならないことを覚えてほしいと願った。彼らは自分たちの精錬され、聖化された品性が、サタンの代理人の感化力に対抗する感化力を及ぼすことによって、世の光となるべきであった。彼らは「あなたがた自身から出たものではなく」というみ言葉を絶えず覚えているべきであった。彼らは自分の心を変えることはできなかった。だから彼らの努力によって魂がサタンの隊列からキリストの隊列へと導かれるとき、働いた変化に対してどのような名声も主張すべきではなかった。(ビュー・アソド・ハラド 1906年5月10日)

神は喜んでみ許に来て命の水を飲もうとする者をすべて招いておられる。神の力は、世と肉と悪魔への勝利を得る広大な働きにおけるただ一つの力の要素である。わたしたちが神の与えてくださる光のどの光線にも従うのは神のご計画による。人は神がおられなくては何も成就することはできず、また神は人類の回復において神と人との協力なしには何も成就しないようご自分の計画を取り決めておられる。人が支えるようにと要求されている部分は測りがたいほどわずかであるが、神のご計画の中にあってそれはその働きを成功させるのにまさに必要な部分である。(原稿 113,1898年)

改心後の罪人の生活の内に見られる大きな変化はいかなる人間の善によってももたらされることはない。……

憐れみにおいて豊かなお方がその憐れみをわたしたちに与えてくださったのである。そうであるならこのお方がわたしたちの救い主となってくださったのであるから、このお方に賛美と感謝が上るようにしよう。わたしたちの心と思いを満たしているその愛が恵みの豊かな流れの中でわたしたちの生活から流れ出るようにしよう。わたしたちがとがと罪の内に死んでいたとき、このお方はわたしたちを霊的な命によみがえらせてくださった。このお方は新しい命で魂を満たしつつ恵みと赦しをもたらしてくださいました。このようにして罪人は死から命へ移していただくのである。彼は今キリストの奉仕における新しい義務を取り上げる。彼の生活は真実で力強く、良い働きで満たされる。「わたしが生きるのも、あなたがたも生きるからである」とキリストは仰せになった。……

第二の恩恵期間はない。今日と呼ばれている今、もしわたしたちが主のみ声を聞いてこのお方に全く向き直るなら、このお方はわたしたちを憐れみ、豊かにゆるしを得させてくださる。(ビュー・アソド・ハラド 1906年5月10日)

回復された平安

「わたしたちの父なる神（と主イエス・キリスト）から、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。」（コロサイ 1:2 英語訳）

キリストは「平和の君」である（イザヤ書 9:6）。キリストのみわざは、罪が破壊した平和を回復することである。「わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている」（ローマ 5:1）。だれでも、罪を捨て、キリストの愛に心を開くことに同意する人は、この天来の平安にあずかる者となる。

これ以外に平和の基はない。心に受け入れられたキリストのめぐみは、敵意をしずめる。それは争いをしずめ、魂に愛を満たす。神との平和また隣人との平和を保っている者は、決して不幸になることはない。彼の心には嫉妬(しつ)はない。そこには悪意のはいる余地がない。憎悪も存在しえない。神と調和している心は、天の平和の共有者である。そして周囲のすべての者に、その祝福された感化を及ぼすのである。平和の精神は、世の争いに疲れ、悩む人々の心に、露のようにとどまる。

キリストに従う者たちは平和の使信をもって世につかわされている。きよい生活の静かな無意識の感化によってキリストの愛をあらわし、ことばと行為によって、他の人に罪をすてさせ、心を神にささげるように導く者は、平和をつくり出す人である。……

平和の精神は彼らが天と結びついている証拠である。キリストの芳しいかおりが彼らをとりまいている。その生活のかおり、その品性の美しさは、彼らが神の子らである事実を世に示している。人々は彼らがイエスと共にいたことを知るのである。（祝福の山 33～35）

キリストの恵みが品性のすべての面に織り込まなければならない。……日ごとにキリストの命へ成長するとき、魂の中に平和な天国が生じる。そのような生活には、絶えず実が結ばれる。キリストの血で買い戻された人々の生活の中で、自己犠牲が絶え間なく現われる。善と義が見られる。静かな内部の経験は、生涯を信心、信仰、柔和、忍耐に満ちたものとする。これがわたしたちの日々の経験となるべきである。わたしたちは罪のない品性、—キリストの恵みのうちに、また恵みによって義とされる品性—を形づくるべきである。（健康への勧告 633, 634）

キリストとの結合

「あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。」(ローマ 13:14)

神は、人々の救いを効果的なものとするために、さまざまな代理人をお使いになる。このお方は彼らにご自分のみ言葉によって、そして牧師たちによって語られ、そしてこのお方は聖霊によって警告、譴責、教訓のメッセージをお送りになる。これらの方法は人々の理解を啓発し、彼らにその義務と罪を示し、彼らが受けることのできる祝福を明らかにし、彼らがキリストの許へ行ってこのお方の内に彼らが必要な恵みを見出すことができるようにと、霊的な欠乏の感覚を彼らの内に目覚めさせるように計画されている。……

各自、自分自身の行為によって、キリストの霊を大切にすることと、その模範に従うことを拒むことによってキリストを脱ぎ捨てるか、あるいは自己放棄と信仰と従順によってキリストとの個人的な結合に入るかのいずれかである。わたしたちは各々自分でキリストを選ばなければならない。なぜなら、このお方ははじめにわたしたちを選んで下さったからである。このキリストとの結合は、生来このお方に敵対している人々によって形成されなければならない。これは完全な依存の関係であり、誇り高い心が入らなければならない関係である。これは厳密な働きであり、キリストに従うと公言する多くの人々が全く知らない働きである。彼らは名目的に救い主を受け入れるが、自分たちの心の唯一の支配者としては受け入れない。……

自分自身の意志を捨てるために、おそらくは彼らの好きな愛情や職業の対象が努力を要求するであろう。多くの人々はそれに躊躇し、ためらい、引き返すのである。しかし、この闘いは真に改心したすべての心が戦わなければならない。わたしたちは内外の誘惑に対して戦わなければならない。自己に対して勝利を得、愛情と欲を十字架につけなければならない。そのとき、魂のキリストとの結合が始まるのである。……この結合が形成されたら、それはただ継続的で熱心な骨折りの努力によってのみ維持することができる。キリストはこの結びつきを維持し、守るためにご自分の力を働かされる。そして依存した無力な罪人は不屈の精力をもって自分の分を果たさなければならない。さもなければ、サタンがその残酷でずる賢い力によって、彼をキリストから分離させてしまう。……

あなたの出生、評判、富、タラント、徳、敬神、博愛……が、あなたの魂とキリストの間の結合の絆を形成するのではない。あなたの教会とのつながり……はあなたがキリストを信じない限り、役に立たない。キリストについて信じるだけでは十分ではない。あなたはこのお方を信じなければならない。あなたはこのお方の救う恵みに完全により頼まなければならない。(教会への証 5 卷 46～49)

神の栄光とは何か

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。」(コリント第二 4:6)

神の栄光はそのご品性である。モーセが山にいたとき、彼は熱心に神に嘆願して祈った、「どうぞ、あなたの栄光をわたしにお示してください」。それに答えて、神は「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ、主の名をあなたの前にのべるであろう。わたしは恵もうとする者を恵み、あわれもうとする者をあわれむ」と宣言された。神の栄光—このお方のご品性—がそのとき表された。「主は彼の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず、父の罪を子に報い、子の子に報いて、三、四代におよぼす者』」(出エジプト記 33:18, 19; 34:6, 7)。

この品性がキリストの生涯のうちに表された。このお方はご自身の模範によって、肉において罪を罰するために、ご自身に罪深い肉の様を取られた。彼は神のご品性を絶えず眺めた。絶えずこのお方はこのご品性を世に表された。

キリストはご自分に従う人々が自分たちの生活にこの同じ品性を表すよう望んでおられる。このお方は、ご自分の弟子たちのためのとりなしの祈りのうちに、「わたしは、あなたからいただいた栄光〔品性〕を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにあり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」(ヨハネ 17:22, 23)。

今日もなお、このお方のご目的はご自分の教会を聖化し、清めることである。「……しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである」(エペソ 5:26, 27)。キリストはご自分の御父に、ご自分が表された品性ほど大きな賜物を、ご自分を信じる人々に与えるようにと願うことはおできにならなかった。このお方のご要求にはなんという大きさがあることであろう。……ああ、わたしたちは、キリストが自分たちに差し出しておられる誉れを十分に感謝することができればよいのだが。このお方のくびきを負い、このお方から学ぶことによって、わたしたちは抱負において、また柔和と心の低さにおいて、品性の香りにおいて、このお方に似た者となる。(サイン・オブ・タイムズ 1902年9月3日)

聖化された知覚力

「その日、人々はその造り主を仰ぎのぞみ、イスラエルの聖者に目をとめ」（イザヤ 17:7）

永遠の宝は、イエス・キリストが望む者にだれにでも与えるように、キリストの保管に委ねられてきた。しかし、あまりにも多く人々がこのお方を信じる信仰を通して自分たちに提供されているこの尊い恵みをすぐに見失ってしまうとはなんと悲しむべきことであろう。このお方は天来の宝を、ご自分を信じ、ご自分を眺め、ご自分の内に宿る人々にお与えになる。……このお方はご自分を愛し仕えるご自分の選ばれた特別な民に、ご自分の許に来て求めるようにと招いておられる。そうすれば、このお方は彼らに命のパンを与え、命の水を授けられ、その水は彼らのうちで永遠の命へと湧き出る井戸のようになるのである。

イエスはわたしたちの世に、積み上げられた神の宝を持って来られた。そしてこのお方を信じる者はみな、このお方の相続人として養子に迎えられる。このお方はご自分のみ名のために苦しむ人々の報いは大きいと宣言される。（*レクテッド・メッセージ* 1巻138）

この世は、神が支配しておられる広大な領域におけるほんの小さな原子に過ぎないが、この小さな墮落した世界は、このお方の御目に囲いから迷い出なかった九十九よりも尊いのである。もしわたしたちがこのお方に信頼するならば、このお方は決してわたしたちをサタン誘惑のえじきなるがままにはさせない。神はキリストがそのために死なれたすべての魂がぶどうの木の一部となり、親木につながれ、そこから栄養を得るように望んでおられる。わたしたちの神への依存は絶対的なものであり、それゆえにわたしたちは非常にへりくだっているべきである。そしてわたしたちがこのお方に依存しているがゆえに、このお方についてのわたしたちの知識は大いに増し加えられるはずである。神はわたしたちがいかなる種類の利己心をも取り除き、自分自身の所有者としてではなく、主によって買われた所有物として、ご自分の許へ来ることを望んでおられる。（*牧師への証* 324, 325）

神はキリストの恵みの完全さのうちに、ご自分の前に歩むことを求めているすべての忠実で真剣な魂を尊び、掲げてくださる。……わたしたちはするどきよめられた知覚力をもって神のみ約束の力強さを感謝し、自分たちに価値があるからではなく、キリストに価値があるがゆえに、すなわちわたしたちが義だからではなく、生ける信仰によってわたしたちのためのキリストの義をわがものと主張するがゆえに、それらを自分自身にあてはめることができるであろうか。（*レクテッド・メッセージ* 1巻108）

要点

「あなたがたをキリストにある永遠の栄光に招き入れて下さったあふるる恵みの神は、しばらくの苦しみした後、あなたがたをいやし、強め、力づけ、不動のものとして下さるであろう。」(ペテロ第一 5:10)

真理が受け入れられるとき、それは生活と品性に根本的な変化をもたらす。なぜなら、宗教とは、心のうちに宿られるキリストを意味し、このお方のおられるところでは、魂は霊的な活動のうちに進んで行き、常に恵みのうちに成長し、完全に至るまで進み続けるからである。……

あなたの感情がかきたてられたからといって、すなわちあなたの霊が真理によってかきたてられたからといって、あなたがクリスチャンであるという本当の証拠とはならない。問題は、あなたはキリスト、すなわちあなたの生ける頭へと成長しているかである。キリストの恵みはあなたの生活にあらわされているであろうか。神はご自分の恵みを人にお与えになる。それは人がさらにこのお方の恵みを望むためである。神の恵みはいつでも人間の心に働きかけていて、それが受け入れられるとき、受け入れた証拠が受け入れた人の生活と品性に現われるようになる。……心のうちにあるキリストの恵みはいつも霊的な命を促進し、霊的な進歩が見られる。……わたしたちは野で植物が成長するのを見ることはなくても、たしかにそれらが成長することを知っているとすれば、自分自身の霊的な力と成長を知ることができないであろうか。……

クリスチャンの恵みと経験の問題全体の要点は、キリストを信じること、神と神の遣わされた御子を知ること尽きる。しかし、ここで多くの人々が失敗する。なぜなら、彼らは神を信じる信仰に欠けているからである。キリストの自己否定とへりくだりにおいてこのお方との交わりに入れられることを望む代わりに、彼らは自己の最上位をいつも求めているのである。……

ああ、もしこのお方があなたを愛して下さったようにあなたがこのお方を愛するならば、神の御子の苦しみという暗い章における経験を遠ざけたりはしないであろう。……わたしたちがキリストの屈辱を熟考し、このお方の自己否定と自己犠牲を眺めるとき、罪ある人間のための神聖な愛の現れに驚きで満たされるのである。キリストのために、わたしたちが屈辱的な性質の試練を経験するように召されるとき、わたしたちがキリストの思いをもっているならば、侮辱に対して憤慨したり、悪に反抗したりせず、柔和に甘んじる。わたしたちはキリストのうちに宿っていた精神を表すのである。……

わたしたちはキリストのくびぎを負い、このお方が失われた者の救いのために働かれたように働くべきである。そしてこのお方の苦しみにあずかる人々は、このお方の栄光にもあずかる者となる。(レビュ・アソド・ハルム 1892年5月24日)

神をたたえよ!

「わたしは主がわれわれになされたすべてのことによって、主のいつくしみと、主の誉とを語り告げ、また、そのあわれみにより、その多くのいつくしみによって、イスラエルの家に施されたその大いなる恵みを語り告げよう。」(イザヤ 63:7)

愛に満ちた神の優しさの感覚が、絶えず魂を清新にするとき、それは平安と喜びの表現によって表情にあらわれる。それは言葉や行いに現れるようになる。そして、キリストの寛容で聖なる霊は、心に働いて、生活の中で改心させる感化力を他の人々にもたらすようになる。……

わたしたちには神のいつくしみ深さについて語り、このお方のみ力について述べる理由がないであろうか。わたしたちは友人が親切にしてくれたとき、彼らの親切に感謝することの特権だとみなす。わたしたちにすべての良き完全な賜物を与えて下さった友なるお方に感謝をお返しすることを、どれほどもっと喜びだとみなすべきことであろう。そうであれば、すべての教会において、神への感謝を培おうではないか。家族の輪の中で神をたたえるように、わたしたちの唇を教育しよう。……わたしたちの捧げ物や供え物が、日ごとに受けている恩寵への感謝を宣言するようにしよう。万事につけ、わたしたちは主の喜びを示すべきである。……

ダビデは次のように宣言している、「わたしは主を愛する。主はわが声と、わが願いとを聞かれたからである。主はわたしに耳を傾けられたので、わたしは生きるかぎり主を呼びまつるであろう」(詩篇 116:1, 2)。祈りを聞き、答えて下さる神のいつくしみ深さのゆえに、わたしたちは自分たちに授けられた恩寵に感謝を表現すべき重大な義務の下にいる。わたしたちは自分たちがしているよりはるかにもっと神をたたえるべきである。祈りへの答えとして受けた祝福はすぐに認めるべきである。……

わたしたちは自分たちの文句やつぶやきや不満によってキリストの御霊を悲しませる。悲惨に思える試練を嘆かわしく述べることによって、神を辱めるべきではない。教育者として受けるあらゆる試練は、喜びを生む。宗教生活全体が向上させるもの、高めるもの、高尚にするもの、そして良い言葉と行いに香るものとなる。(ビュー・アード・ワルド 1908年5月7日)

神の平安があなたの魂のうちに支配するようにしなさい。そのとき、あなたはすべての苦しみを忍ぶ力を得る。そしてあなたは耐えるための恵みがあることを喜ぶのである。このお方のいつくしみ深さを語りなさい。このお方の力を述べなさい。あなたの魂を取り囲む雰囲気や芳しいものとしなさい。……心と魂と声をもってこのお方、すなわちあなたの助けであり、あなたの救い主であり、またあなたの神であられるお方をたたえなさい。(今日のわたしの生涯 174)

何ひとつ差し控えず

「主なる神は日です、盾です。主は恵みと誉とを与え、直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。」(詩編 84:11)

「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(ローマ 8:32)。わたしたちのために神が払われた大いなる犠牲を感謝しようではないか。わたしたちが今ほどこのお方の恵みの賜物に歓迎されている時は今後ないであろう。キリストは人類のためにご自分の命をお与えになった。それはこのお方がどれほど彼らを受しておられるかを彼らが知るためであった。このお方はだれも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに至ることを望んでおられる。意志をこのお方に明け渡すすべての人は、神の命で量られる命を得ることができる。……正義の剣は、彼らが自由になることができるために、このお方の上を下った。このお方は彼らが生きるために死なれた。……

わたしたちは、神が一つ一つの新しい経験に応じる強さをわたしたちに与えるために共にいて下さることを覚えて、神のみ言葉の原則に固く立つべきである。つねにわたしたちの生活のうちに義の原則を維持しよう。それによって主のみ名のうちにわたしたちが力から力へと進んで行くためである。……わたしたちは主がご自分の律法を守る民を通して、またご自分の恵みの力を通して実行してこられた働きが、時が進むにつれますます強く、ますます効果のあるものに進展するよう、非常に尊いものとして大事にすべきである。敵は神の民の識別力を曇らせ、彼らの能力を弱めようとしている。しかし、もし彼らが神の御霊の指示通りに労するならば、このお方は久しく荒れすたれたところを建てる働きのために彼らの前に機会の扉を開いて下さる。彼らの経験は、主が力と大いなる栄光をもってご自分の最終的な勝利の印をご自分の忠実な者たちの上に押すために下って来られる時まで、確証と力における継続的な成長の経験となる。

主は、第三天使のメッセージの働きがますます力を増し加えて進展するのをご覧になりたいと望んでおられる。このお方がご自分の民に勇気と力を与えるために各時代に働いてこられたように、この時代にも、ご自分の教会のためにご自分の目的を果たす勝利をもたらしたいと切望しておられる。このお方は聖徒たちが力からさらに大きな力へ、信仰からこのお方のみ事業の義と真理を信じるさらに増し加えられた信仰へと、一致して前進するよう命じておられる。(ビュー・アズ・ワルド 1912年1月11日)

思想を支配？

「それだから、心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現れる時に与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望んでいなさい。」(ペテロ第一 1:13)

思想と想像を制御することが義務であることを自覚している者はほとんどいない。訓練されていない思いを有益な主題にとどめておくことは困難である。しかし、もし思想が適切に用いられないならば、宗教は魂のうちで繁茂することができない。思いは聖なる永遠の事柄で占められていなければならない。さもなければ、取るに足らない表面的な思想をいただくようになる。知的能力と道徳的能力のいずれも訓練されなければならない。そうすれば、それらは働かせることによって強くなり、向上する。

このことを正しく理解するために、わたしたちは自分たちの心が生来墮落していること、また自分では正しい道に従っていけないことを覚えていなければならない。わたしたちが勝利を得ることができるのは、ただわたしたちの側の最も真剣な努力と一緒にあった神の恵みによってのみである。(両親、教師そして生徒への勧告 544)

すべての悪い傾向は、キリストの恵みを通して、やる気のない優柔不断なやり方ではなく断固とした目的とキリストを模範とする高潔な決意をもって、抑制することができる。あなたの愛がイエスの愛されたものへと向けられ、正しい動機に力を与えないようなものからは引っ込められるようにしなさい。毎日、断固とした精力をもって学び、品性を向上させるよう努めなさい。あなたは自分自身を手中に収め、神があなたになってほしいと望んでおられることをあなたが知っているとおりの人物にならなければならない。(彼を知るために 135)

知性は、心と同様に、神の奉仕に捧げられなければならない。このお方はわたしたちのすべてを要求しておられる。キリストに従う者は、どれほど罪なく賞賛に値するものに見えても、啓発された良心が自分に、情熱を衰えさせ、あるいは霊性を減じるものだと告げるような満足にふけったり、事業に携わったりすべきではない。すべてのクリスチャンは悪の潮流を押し返し、わたしたちの青年を墮落へ一掃するような感化力から救うために労すべきである。神がわたしたちを助けて、潮流に逆らって道を押し進ませて下さるように。(両親、教師そして生徒への勧告 544)

負債

「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしてください。」(マタイ 6:12)

ここに大なる祝福が条件つきで求められている。わたしたち自身がこれらの条件を述べるのである。わたしたちは自分たちに対する神の憐れみが、他の人々に及ぼすわたしたちの憐れみによって量られるように求めるのである。キリストは主がわたしたちを取り扱われる規則であると宣言しておられる。「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう」(マタイ 6:14, 15)。すばらしい条件である。しかし、それらはなんとわずかしか理解されず、注意が払われていないことであろう。もっともよくある罪の一つ、かつもっとも有害な結果を伴う罪は、許さない精神にふけることである。どれほど多くの者が、敵意や復讐心をいだきながら、神のみ前に頭を垂れて、自分たちが許すように許して下さいと求めることであろうか。たしかに、彼らにはこの祈りの重要性の真の自覚を持つことができないのである。さもなければ、彼らはその言葉をあえて口にはすることはできないはずである。わたしたちは毎日、毎時間、神の許しの憐れみに依存している。そうであれば、どうして自分たちの同胞である罪人に対して苦々しい思いや悪意をいだくことができようか。(教会への証 5 巻 170)

わたしたちがキリストに対して非常に大きな義務の下にあるという事実によって、わたしたちはこのお方が贖うために死なれた人々に対して最も聖なる義務の下にいる。わたしたちはキリストがわたしたちに表して下さいのと同じ同情、同じ優しい思いやりと無我の愛を彼らに対して表すべきである。(同上)

許さない者は、神のあわれみを受ける唯一の通路を遮(しゃ)断しているのである。わたしたちを傷つけた者が、その悪を告白しないならば、彼らを許さなくともよいと考えてはならない。悔い改めと告白によって心を低くすることは、疑いなく彼らのなすべきことである。しかし、わたしたちは、彼らがあやまちを告白してもしなくても、わたしたちに対し罪を犯した者に対してあわれみの心を持たなければならぬ。どんなにひどく彼らがわたしたちを傷つけたとしても、恨みをいだき、自分の受けた危害について自己をあわれむ心を持つべきではない。神に対するわたしたちの罪を許されたいと望むように、わたしたちは、わたしたちに対して悪をなしたすべての者を許すべきである。……

わたしたちが神のもとに来る時、まずわたしたちが出会う条件は、自分が神からあわれみを受けたのであるから、他の人々に神の恵みをあらわすために自己をささげることである。(祝福の山 142～144)

キリストの学校で

「わたしはあなたを教え、あなたの行くべき道を示し、わたしの目をあなたにとめて、さとすであらう。」(詩編 32:8)

人間の学校の知恵を習得するために勤勉に努力している者は、自分が別の学校の生徒として求められていることを覚えるべきである。キリストはかつて世が知る中で最大の教師であられる。このお方は人間に天国直送の知識をもたらされた。……

キリストの学校では、生徒は決して卒業しない。生徒の中には老いも若きもいる。神聖な教師の教えに注意を払う人々は、絶えず知識と精練と魂の高潔さにおいて前進し、こうして彼らは永遠に進級が続く高等学校に入る準備ができるのである。

無限の知恵なるお方がわたしたちの前に命の偉大な教訓—義務と幸福の教訓—をおいておられる。これらはしばしば学ぶのが困難であるが、これらなしには、本当の進歩を遂げることができない。……わたしたちが純潔で聖なる者たちの社会にふさわしい者となるべきなのは、この世において、すなわちその試練と誘惑のただ中においてである。より重要性の少ない研究に没頭するあまり、キリストの学校で学ぶことをやめる人々は、無限の損失に直面しているのである。……

キリストの宗教には、存在全体を変え、人をあらゆる墮落的で卑屈な悪徳に超越させ、思想と願望を神と天に向かって上げさせる再生の感化力がある。……創造主が人の子らにお授けになったすべての能力、すべての特質は、このお方の栄光のために用いられるべきである。そしてこのように用いることに、最も純潔で聖にして幸福な働きが見出されるのである。宗教的な原則が最上のものとして掲げられるとき、知識の獲得、あるいは知性の修養のうちに前進する一步一步は、人間が神と、有限な者が無限のお方との同化に向かう一步となるのである。……

聖なる導きに従っている人は、救いの恵みと真の幸福の唯一真実な源泉を見出し、自分の周囲にいるすべての人に幸福を与える力を得たのである。……神への愛は、すべての嗜好と願望をきよめて高尚にし、すべての愛情を増大し、すべての価値ある喜びを明るくする。それは人がすべて真実なこと、善なること、美しいことを感謝し、喜ぶことができるようにする。(両親、教師そして生徒への勧告 50～53)

吟味の日

「主よ、わたしをためし、わたしを試み、わたしの心と思いとを練りきよめてください。」(詩編 26:2)

主はご自分のみ摂理のうちにご自分が彼らの道徳的な力を試し、彼らの行為の動機を明らかにできるようなところへ人を連れていかれる。こうして彼らが自分自身のうちにある正しいことを向上させ、悪いことを取り除くことができるためである。神はご自分の僕たちが自分自身の心の道徳的な仕組みを知るようになることを望んでおられる。これを実現するために、このお方はしばしば彼らが清められるように、苦難の火が彼らを襲うことを許される。……

真の恵みは、試されることを喜ぶ。もしわたしたちが主によって探られることを厭うならば、わたしたちの状態は実に深刻である。神は魂の洗練者であり、精錬者であられる。炉の熱の中では、かすは永遠にクリスチャン品性の真の銀と金から分離している。イエスはテストを見守っておられる。このお方は貴重な金属がご自分の神聖な愛の輝きを反射させるために、何が清められるべきかをご存じである。(教会への証 4 巻 85, 86)

わたしはあなたに、「はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味する」よう嘆願する(コリント第二 13:5)。クリスチャンの愛の温かさと純潔さを維持するためには、絶えずキリストの恵みの供給が必要である。……

この戦いと試練の時に、わたしたちは義の原則から、確固とした宗教的な確信から、キリストの愛の永続的な確証から、そして神聖な事柄における豊かな経験から引き出すことのできるあらゆる支えと慰めを必要としている。わたしたちは恵みにおいて着実に成長する結果としてのみ、キリスト・イエスにおける満ちみちた男女にまで到達するのである。(同上 5 巻 103 ~ 105)

試みから逃れるのではなく、試みのただ中においてクリスチャンの品性は磨かれる。拒絶や反対にさらされると、キリストの弟子はますます用心するようになり、一層熱心に偉大な助け主に祈るようになる。神の恵みによりきびしい試みに耐えると、忍耐強く、用心深く、不屈になり、また、神を信じる信仰が深まり、長続きするようになる。クリスチャン信仰の勝利とは、キリストに従う者が、苦しみを受けるが強められ、服従するが勝利し、たえず死に渡されるが生かされ、十字架を負うが、栄光の冠を受ける、まさに、このことである。(患難から栄光へ下巻 160)

良い行いについてはどうか

「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあつて造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。」(エペソ 2:10)

わたしたちが神に受け入れられるのは、このお方の愛する御子を通してのみ保証されており、良い行いはこのお方の罪を許す愛の働きの結果にすぎない。わたしたちには何の手柄もなく、自分の魂の救いに役立つと主張できるような自分の良い働きを与えるものは何もない。救いは信じる者への神の無償の賜物であり、ただキリストのゆえに彼に与えられるものである。悩む魂はキリストを信じる信仰を通して平安を得ることができる。そして彼の平安は自分の信仰と信頼に比例する。彼は自分の良い行いを自分の魂の救いのための嘆願として差し出すことはできない。

しかし良い働きには何も真の価値がないのであろうか。毎日刑罰も受けずに罪を犯す罪人が、キリストを信じる信仰を通して誠実に働こうとする者と同じ恩寵をもってみなされるのであろうか。聖書は、次のように答えている。「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあつて造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである」。このお方の神聖な取り決めにおいて、このお方の価値のない者への恩寵を通して、主は良い行いが報いられるように定められた。わたしたちはキリストの功績を通してのみ受け入れられる。そしてわたしたちのなす憐れみの行為、愛の行いは、信仰の実である。そしてそれらはわたしたちにとって祝福となる。なぜなら、人は自分たちの行いに従って報いられるからである。わたしたちの良い行いを神に受け入れられるものとするのは、キリストの功績の香りである。そしてこのお方の報いて下さる行いをできるようにするのは、恵みである。わたしたちの行いは、そのうちにもそれ自体にも何の功績もない。わたしたちは自分にできることをみな為したとき、自らをふつつかな僕だとみなすべきである。わたしたちには神から感謝を受ける価値はない。なすべき自分たちの義務を果たしたにすぎず、自分自身の罪深い性質の力ではわたしたちの働きを果たすことはできなかったのである。

主は、わたしたちにご自分に近づくようにと命じられた。そうすればこのお方はわたしたちに近づいて下さる。そしてこのお方に近づくとき、わたしたちはこのお方のみ手より報いを受ける働きをなすための恵みを受けるのである。(SDA バイブル・コメント [E.G. コット・コメント] 5 巻 1122)

愛の働きは信仰のわざから生じる。……わたしたちの忙しい活動それ自体が救いを確証するものではないことは事実であるが、わたしたちをキリストに結合させる信仰は魂を活動へとかきたてることもまた事実である。(同上 6 巻 1111)

警戒せよ!

「誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、肉体が弱いのである」。(マルコ 14:38)

今日多くの者が、弟子たちのように眠っている。彼らは誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていない。(教会への証 8 巻 100)

すべての魂は警戒していなさい。敵はあなたの進路にいる。注意深く隠された何かみごととなわなが、あなたを気づかぬうちにとらえることがないように、油断なく警戒し、絶えず見張っていなさい。不注意で無関心な者は、主の日が夜の盗人のように自分たちに望むことがないように用心していなさい。……

勝利したい者は、見張らなければならない。なぜなら、世俗的なもつれや過ちや迷信をもって、サタンはキリストに従う者たちをキリストから勝ち取ろうと奮闘しているからである。わたしたちがまぎれもない危険やあぶなく矛盾した動きを避けるだけでは十分ではない。わたしたちはキリストのそば近くにとどまり続け、自己否定と犠牲の道を歩んでいなければならない。わたしたちは敵地にいるのである。天から投げ落とされた者は、非常な力をもって下ってきた。思いつく限りの手管と考案物をもって、彼らは魂を虜にしようとしている。わたしたちが絶えず警戒していない限り、たやすく彼の数え切れないほどの欺瞞に陥ってしまう。(同上 99, 100)

警告、訓告、約束はみな、世の終わりが臨んでいるわたしたちのためである。「だから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして慎んでいよう」(テサロニケ第一 5:6)。……忍び寄る敵に対して警戒しなさい。古い習慣や生来の傾向に対して警戒しなさい。さもないとそれらは自己主張するようになる。それらを押し戻し、見張りなさい。思想を見張り、計画を見張りなさい。さもなければそれらは自己中心的になる。キリストがご自身の血潮で買われた魂を見張りなさい。彼らに善をなす機会を見張りなさい。(同上 6 巻 410)

もしあなたがイエスに近づき、あなたの公言を良く秩序だてられた生活と信心深い会話で飾るように努めるなら、あなたの足は禁じられた道に迷いこむことから守られる。もしあなたがただ見張り、絶えず目を覚まして祈りさえするならば、もしあなたがあたかも神のすぐみ前にいるかのようにすべてのことをなすならば、あなたは誘惑に屈することから救われ、最後まで純潔でしみなく汚されずに保たれることを希望できる。もしあなたが最初の確信を最後まで堅く守るならば、あなたの道は神のうちに確立される。そして恵みが始められたことを、栄光がわたしたちの神の王国において仕上げるのである。(同上 5 巻 148)

守られ、つまずかない者とされ

「あなたがたを守ってつまずかない者とし、また、その栄光のまゝに傷なき者として、喜びのうちに立たせて下さるかた」(ユダ 24)

悪がはびこり、多くの人の愛が冷えるこの終わりの時代に、神はご自分のみ名に栄光を帰し、不義を責める者として立つ民をもっておられる。彼らは、世が神の律法の規則を無効にしようとしているときに、神の律法に忠実な「特別な民」として立つ。そして神の改心させる力がご自分の僕たちを通して働くときに、闇の万軍は激しく断固とした反対のうちに隊列を組む。……わたしたちが天の神に仕えようと決心するときから、この現在の悪の世から救出されるときまで、絶えず闘いがある。この戦争から解放される時はない。……

わたしたちの働きは精力的なものである。そしてイエスの忠実な兵士として、わたしたちは敵の本拠地のただ中で、血染めの旗を担わなければならない。……もしわたしたちが自分たちの武具を下に置き、血染めの旗を低くし、サタンの虜となり僕となることに同意するならば、戦いと苦難から解放される。しかし、この平安はキリストと天を失うことによるのみ得るものである。わたしたちはこのような条件に基づいて平安を受け入れることはできない。地上歴史の終りまで、背信と罪を通して平安を得るよりは、戦争、戦争あれ。

背信の働きは、神の律法の要求に対する何らかの心のひそかな反逆のうちに始まる。汚れた願望や不法の野心を心に抱き、それにふけると、不信と闇が魂を神から引き離す。もしわたしたちがこれらの悪に打ち勝たないならば、それらがわたしたちに打ち勝つのである。……

霊的な誇りや、汚れた願望や、悪の思いや、イエスとの緊密で神聖な交わりからわたしたちを引き離す何らかの事柄にふけると、わたしたちの魂が危険にさらされる。……わたしたちは「永遠のいのちを獲得」したいなら、「信仰の戦いをりっぱに戦いぬ」かなければならない(テモテ第一 6:12)。わたしたちは、「信仰により神の御力に守られているのである」(ペテロ第一 1:5)。もし背信の思想があなたにとって嘆かわしいものであれば、そのとき「悪は憎み退け、善には親しみ結び」なさい(ローマ 12:9)。そして「あなたがたを守ってつまずかない者とし、また、その栄光のまゝに傷なき者として、喜びのうちに立たせて下さるかた」を信じなさい。(ビュー・アンド・ワールド 1888年5月8日)

強められて

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストご自身と、わたしたちを愛し、恵みをもって永遠の慰めと確かな望みとを賜わるわたしたちの父なる神とが、あなたがたの心を励まし、あなたがたを強めて、すべての良いわざを行い、正しい言葉を語る者として下さるように。」(テサロニケ第二 2:16, 17)

救い主はいやしの働きをなさるたびに、それを人々の思いと魂に神の原則を植えつける機会となさった。このことに彼の働きの目的があった。彼が世的な祝福をお与えになったのも、人々の心に、その恵みの福音を受けやすくさせるためであった。(ミニストリー・オブ・ヒーリング 6)

三年間弟子たちはイエスのりっぱな模範を見てきた。毎日キリストと共に歩み、語り、重荷を負って、疲れている者にキリストがおかけになる励ましのお言葉をきき、病める者や、苦しむ者のために、その力のあらわれるのを見てきた。そしてイエスが、弟子たちをあとにして、行かれるときがきたとき、キリストはそのみ名によってキリストの働きを前進させる恵みと力をお与えになった。彼らは愛といやしのキリストの福音の光を広く輝かすはずであった。

弟子たちがした仕事を、わたしたちもしなければならない。クリスチャンは、だれでもみな伝道者でなければならない。助けを必要としている人に同情といつくしみをもって奉仕……しなければならないのである。……救い主はご自分を人類のすべての子供と等しくなさった。……そのしもべたちは、自分のまわりの滅び行く世界と分離されているかのように思ってはならない。彼らは人類という大家族の一部であって、天は彼らを聖徒たちの兄弟としてみるとともに罪びとの兄弟とみるのである。……教育であれ、教養であれ、品性の高潔さ、あるいはクリスチャンとしての訓練や宗教的体験であっても、すべてそういう者によって他の人よりも特権を与えられているわたしたちは、それほど恵まれていない人々に対して、責任を負わされているのである。わたしたちはできる限りその人々に奉仕しなければならない。……

神の子となる者はそのときから自分を世を救うためにおろされた鎖の一環と考え、イエスのあわれみ深いご計画においてキリストと一つになり、失われた者をたずねて救うために、キリストと共に出て行かなければならない。(同上 74～76)

社会は、人間が失った主権を回復し、自己に勝利するため神の恵みがどんなことをなするかを示す実際の実例を必要としている。今の世界が最も必要としているものはキリストのような生涯にあらわされる福音の救いの力を知ることである。(同上 103)

分かち合う喜び

「実際、わたしたちの主イエスの来臨にあたって、わたしたちの望みと喜びと誇の冠となるべき者は、あなたがたを外にして、だれがあるだろうか。あなたがたこそ、実にわたしたちのほまれであり、喜びである。」(テサロニケ第一 2:19, 20)

神は、罪人を救うのにわれわれの助けがなくても、目的を達することがおできになったのである。だがわれわれがキリストのような品性を発達させるためには、キリストの働きにあずからねばならない。キリストのよこびすなわちキリストの犠牲によってあがなわれた魂を見るよこびにはいるためには、われわれは彼らをあがなうキリストの働きにあずからねばならない。(各時代の希望上巻 163)

イエスはひとりびとりの魂を、神のみ国への招待を与えられなければならない者としてごらんになった。イエスは人々の幸福を願う者として、彼らの中にはいつて行くことによって、彼らの心をとらえられた。彼は大通りで、個人の家々で、舟の上で、会堂の中で、湖の岸辺で、婚宴の席で、彼らを求められた。彼は人々が日常の働きをしているところで彼らに会い、彼らの俗事に興味を示された。イエスのご自分の教えを家庭に持ち込み、家族をそれぞれの家庭においてイエスのきよご臨在の感化のもとにおかれた。イエスの個人的な強い同情は人々の心をとらえる助けとなった。……

イエスが弟子たちを訓練されたのは個人的な接触とまじわりによってであった。イエスは、ある時は山腹で彼らの中にすわって教え、ある時は海辺で、ある時は彼らといっしょに道を歩きながら、彼らに神の国の奥義を示された。イエスは今日人々がするように説教をなさらなかった。人々の心が天来のことばを受けようとして開かれているところではどこでも、イエスは救いの道の真理をとき明かされた。イエスは弟子たちにこれをしなさい、あれをしなさいと命令なさらず、「わたしに従ってきなさい」と言われた(ルカ 9:59)。彼は民にどう教えるかを弟子たちに見せるために、いなかや町を旅行される時には彼らをおつれになった。……

人類と利害を一つにされたキリストの模範は、キリストのみことばをのべつたえる者やキリストの恵みの福音を受け入れた者のすべてが従わねばならない模範である。……講壇からだけでは人々の心は天来の真理に動かされない。もう一つの働きの領分がある。それは目立たないかもしれないが、大いに有望である。それは身分のいやしい人々の家庭に、身分の高い人々の邸宅に、もてなしの食卓に、無邪気な親睦の集りの中にみいだされる。……どこへ行くにも、われわれはイエスをいっしょにおつれし、人々に救い主のとうとさを示すのである。(各時代の希望上巻 176, 178)

神に栄光を帰す

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。」(コリント第二 4:7)

人間が持っている美点はみな、神の賜物である。彼らの善行は、キリストを通して与えられた神の恵みによって行なわれた。彼らは、すべてを神に負うているのであるから、彼らがどんな人間で、どんな行為をしようとその誉れは神にだけ帰すべきである。彼らは、ただ、み手の中の器に過ぎないのである。

そればかりではない。聖書歴史のすべての教訓が教えているように、人間を賞賛し、高めることは危険である。なぜなら、人間が、神に全く依存していることを見失い、自分自身の力にたよるようになると、彼は必ず墮落するからである。人間は、人間以上に強い敵と戦っている。……われわれは、自分の力で戦い続けることはできない。そして、心を神からそらし、自己高揚と自己依存に陥れるものは何であつても、必ず、われわれを敗北させるものである。聖書は、人間の能力にたよらず、神の力にたよることを奨励するのをその主題としている。(人類のあけぼの下巻 414, 415)

わたしたちの天父は、人に救いを宣布するために天から天使を遣わされたのではなかった。このお方はご自分のみ言葉の尊い真理をわたしたちに開いて下さり、わたしたちの心に真理を植えつけて下さった。それはわたしたちが闇の中にいる人々にそれを伝えることができるためである。もしわたしたちが本当に神のみ約束の中にある神の尊い賜物を味わったならば、この知識を他の人々に分け与えるのである。……

わたしたちは個人個人、自分たちに重大な責任が負わされているかのように働くべきである。この働きに倦むことのない精力と機転と熱心さを表し、隣人や友人たちが置かれている危険を感じて、重荷を取りあげるべきである。わたしたちはキリストが働かれたように働くべきである。イエスのうちにあるがままの真理を提示し、魂の血がわたしたちの衣についていないようにすべきである。同時にわたしたちは神への完全な依存と信頼を感じるべきである。なぜなら、わたしたちは助けるためのこのお方の恵みと力がなければ、何一つできないことを知っているからである。パウロが植え、アポロが水をやるが、神だけが成長させることがおできになるのである。(天国で 331)

わたしたちの義務、安全、幸福と有用性、そしてわたしたちの救いは、各々がキリストの恵みを得るために最大限の勤勉さを働かせるよう要求している。(同上 184)

刈り取り

「それは、キリスト・イエスにあつてわたしたちに賜わたつた慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。」(エペソ 2:7)

自分の心と生活のうちに神の祝福の流れが他の人々に流れ出るための場所を与える者はだれでもその人自身、豊かな報いを受けないではない。……

魂に宿るキリストの恵みは、自我とは反対の品性、すなわち生活をきよめ、高め、豊かにさせる品性を育ててくれる。隠れたところでなされた親切な行為は、お互いの心を結びつけ、すべて寛大な思いの源であるおかたの心に人々を近づける。花から流れるかおりのように静かに生活から流れ出るわずかな心づかいや愛と自己犠牲の小さな行為—こうしたものが少なからず人生の祝福と幸福に寄与する。そして他人の利益と幸福のために自己を否定することは、たとえこの世では人目につかず賞賛されないものであっても、天では栄光の王—富んでおられたがわたしたちのために貧しくなられたおかた—との結合のしるしと認められていることが、ついにはわかるのである。

親切の行為は隠れたところでなされても、その人の品性に現われる結果は隠すことができない。わたしたちは、キリストの弟子として、全くおのれをささげて働くなら、心は神の心と一つとなり、神の聖霊はわたしたちの心に働きかけて、神のみ手がふれるのに答えて聖なる音をかなでるようにしてくださるのである。

ゆだねられた賜物を賢明に活用する者にはさらにタラントを増し加えられるおかたは、愛するみ子を信じ、その恵みと力を通して活動する民の奉仕を喜んで認めてくださる。善行によって自分の能力を働かせながらクリスチャン品性の発達と完成を求めている者は、そのまいたものをきたるべき世界で刈り取る。この世界で始められた働きは、より高くよりきよい来世において、その極致に達して永遠に続くのである。(祝福の山 100, 102)

「彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さる」主は、「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。……」と言われた(ローマ 10:12、ルカ 6:38)。……主の奉仕に払われたすべての犠牲は「神の恵みの絶大な富」にしたがつてつぐなわれるのである。(各時代の希望上巻 308,309)

世は待っている

「すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。」(コリント第二 4:15)

教会は人類救済のために神がお定めになった機関である。教会は奉仕するために組織された。その使命は世界に福音を伝えることである。教会を通して神の満ちあふれる豊かさを世界に反映させることが、神のはじめからのご計画であった。暗やみから驚くべき光に招き入れられた教会員たちは、神の栄光をあらわさなければならない。教会はキリストの恵みに富んだ宝庫であり、教会を通して神の愛がついには「天上にあるもろもろの支配や権威」に対してさえも十分明らかに示されるのである(エペソ 3:10)。……

教会は神が反逆した世に持つておられる神のとりでであり、神ののがれの町である。……

霊的暗黒の時代に神の教会は、山の上にある町のようなものであった。各時代にわたり、各世代を通じて天の高潔な教えは教会の中で明らかになってきた。教会はどんなに弱く欠陥だらけのように見えても、神が特別な意味で最高の関心を払われる対象である。教会は神の恵みの舞台であり、そこで神は人々の心を変える力をあらわすことを、およこびになるのである。(患難から栄光へ上巻 1～4)

太陽の光線が地球の最も遠い隅にまで刺し貫くように、神は福音の光が地上のすべての魂に及ぶように計画しておられる。……敵が男女の思いを奪うためにかつてなかったほど働いているこの時に、わたしたちはますます活動を増し加えて労しているべきである。勤勉に、私心なく、わたしたちは諸都市に一大路やかきねに―最後の憐れみのメッセージを宣布すべきである。すべての階級の人々に伝えなければならない。わたしたちが働くときに、さまざまな国籍の人と出会うことであろう。だれ一人として、警告を与えずにやり過ぎてはならない。主なるイエスは、高い階級のためばかりでなく、また他の人々をのぞいたある一つの国家のためではなく、全世界のための神の賜物であられた。このお方の救いの恵みは世界を取り巻いている。だれでも望む者は、命の水を飲むことができる。世界は、現代の真理のメッセージを聞くのを待っている。(天国で 340)

キリストは待っておられる

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(マタイ 24:14)

キリストの福音は始めから終わりまで救いの恵みの福音である。それは明確であり、主導権を握る考えである。それは困窮している人にとって助けであり、真理に対して盲目な人の目には光であり、真の基礎を求めている人には案内である。十分にしておしえの救いがすべての人の手の届くところにある。キリストは許しを語ろうと、また無償で差し出されている恵みを与えようと待ち望んでおられる。このお方は見張り、待ち、エリコの門のところで盲人に言われたように、「わたしに何をしてほしいのか」と言っておられる(マルコ 10:51)。わたしはあなたの罪を取り除いてあげよう。あなたをわたしの血潮で洗ってあげよう。

人生のあらゆる大路には、救われるべき魂がいる。盲人は闇の中で手探りをしている。彼らに光を与えなさい。そうすれば神はあなたをご自分の働き人として祝福して下さる。(伝道 552, 553)

わたしたちはキリストのみ事業においてより大きな熱心さが必要である。真理の厳粛なメッセージは、神がわたしたちの努力と共に働いておられ、いと高きお方がわたしたちの力の生ける源であられるという印象を不信心者に与えるような熱心さをもって伝えられるべきである。(同上 697)

主イエス・キリストの来臨を待つばかりでなく、早めることがすべてのクリスチャンの特権である。このお方のみ名を公言するすべての人がこのお方の栄光のために実を結んでいれば、どれほどすみやかに全世界は福音の種をまかれていることであろう。すみやかに最後の収穫は刈り取られ、キリストが尊い穀物を集めに来られるのである。(教会への証 8 卷 22)

神の使命者たちを通して巻物が世に開かれている時が来た。第一、第二、第三天使のメッセージに含まれた真理が、あらゆる国民、部族、国語、民族に伝えられなければならない。それがすべての大陸の闇を明るくし、海の島々にまで及ばなければならない。この働きに遅延があってはならない。

わたしたちの合言葉は、前進、つねに前進であるべきである。天使たちは道を備えるためにわたしたちの前に行く。さらに向こう側に越えた地域に対するわたしたちの重荷は、全地が主の栄光で明るくされる時まで、決して下ろすことはできない。(福音宣伝者 470)

全天は待っている

「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい。」(ルカ 14:23)

いま全宇宙の最大の関心がこの小さな地球に向けられている。それは、キリストが地球の住民の魂のために無限の価を払われたからである。(キリストの実物教訓 157)

宇宙にある万物は、真理を知っている人々に、第三天使のメッセージの中で自分たちに知らされた真理の宣布のために、全面的に献身するよう求めている。……悪魔の代理人の働きは、すべてのクリスチャンが自分の持ち場につくよう求めている。

わたしたちに与えられている働きは重大なものであり、そこには賢明で無我的人、すなわち魂を救うために自らを捧げて、無私な努力を払うことがどういうことかを理解する人が必要とされている。しかし、生ぬるい人の奉仕は全く必要とされていない。なぜなら、そのような人をキリストは用いることがおできにならないからである。人間の苦悩が心の琴線に触れる人々、その生活に光と命と恵みを受け与えている証拠が現れている男女が必要とされている。

神の民は自己否定と犠牲のうちに、自分たちの目的を全世界に憐れみのメッセージを伝えることとして、キリストの近くに来なければならない。主が召し、導かれるままに、ある人々はある方法で働き、他の人々は別の方法で働く。しかし、彼らは働きが完全に欠けるところのないものとなるように努めてみな共に奮闘しなければならない。(教会への証 9 卷 25, 26)

教会は教会員が墮落の縁にいる魂を救うという偉大な働きにおいて協力できるように恵みの御座から助けを求めている間は、後退することはない。……

全天は、献身した水路、すなわち神がご自分の民に伝達し、彼らを通して世に伝達できる水路を待っている。神は献身した自己否定の教会を通して働かれ、特にサタンが牧師も民も両方の魂を欺くために見事な方法で働いているこの時代に、ご自分の御霊を目に見える栄光に満ちた方法で表される。……

教会は自分の責任に目覚めないであろうか。神は世がかつて知る中で最も偉大な伝道の御霊を、自己否定と自己犠牲の献身をもって働く人々に与えようと待っておられる。(セラフ・メッセージ 1 卷 117)

神の子

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。」(ヨハネ第一 3:2)

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である」。だれか人がこれに等しい権威を持つことができるであろうか。わたしたちは無限の神の子と呼ばれる以上に高い地位を占めることができるであろうか。(教会への証 4 巻 365)

有限な人間が全能者と結びつくことができるとは、なんとすばらしい思想、なんと聞いたこともないへりくだり、なんと驚くべき愛であろう。「その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(ヨハネ 1:12)。「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である」。何か地上の榮譽でこれに等しいものがあるか。

クリスチャン人生を実際通りのものとして表そうではないか。その道を快活で、魅力的で、興味深いものとしよう。わたしたちはしようと思えばそうすることができる。自分自身の思いを霊的で永遠の事柄の生き生きとした光景で満たし、そうすることによって、他の人々の思いにそれらが現実となるよう助けよう。信仰は、イエスがわたしたちの仲保者として神の右に立っておられるのを見る。信仰はこのお方がご自分を愛する人々のために用意に行かれた住まいを見る。信仰は勝利者に衣と冠がすっかり整えられているのを見る。信仰は贖われた者の歌を聞き、永遠の栄光を近づける。わたしたちはことごとく麗しい王を見たいならば、愛する従順のうちにイエスのそばに来なければならぬ。(節制 212, 213)

御父と御子イエス・キリストとの交わりをもつということは、高尚にされ、高められるということであり、言い表しがたい喜びと満ちみちた栄光にあずかる者とされることである。食べ物、着る物、地位、富にはそれぞれの価値がある。しかし、神とのつながりを持ち、このお方の神性にあずかる者となるということには、価のつけられないほどの価値がある。わたしたちの命はキリストと共に神のうちに隠されるべきである。そして、「わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない」にもかかわらず、「わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には」(コロサイ 3:4)、「わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなる……。そのまことの御姿を見るからである」。クリスチャン品性の王子にふさわしい威厳が太陽のように輝き出て、キリストのみ顔からの光線が、キリストが清くあられるように自らを清めた人々に反映するようになる。神の子となる特権は、たとえわたしたちの所有するすべてのもの、命でさえ犠牲にすることになったとしても、安価なものである。(教会への証 4 巻 357)

ゴールを目の前にして

「目標をみざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。」(ピリピ 3:14)

「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである」(コリント第一 9:24～27)。

競技場で走る者は、特別な栄誉だと思われている月桂樹の冠を得るために、自分たちの筋肉や脳やあらゆる部分が走るのに最上の状態であるように万事において節制をした。……ただ一人だけが賞を得た。しかし、天の競技ではわたしたちすべての者が走って、賞を受けることができる。このことには、不確かさもリスクもない。わたしたちは天の恵みをまとい、それから目をまっすぐに不死の冠に向けて、自分たちの目の前にいつも原型なるお方を見続けていなければならない。……わたしたちの神聖な主の謙遜な自己否定の生涯を、つねに視野に入れていなければならない。そうすれば、わたしたちがこのお方を模倣しようと努め、賞与を目指して目を留め続ける間、わたしたちはこの競技を確信をもって走ることができる。(教会への証 2 巻 357, 358)

もし啓発された良心によって支配されておらず、神を畏れない異教の人々が、単に朽ちる物体の花冠と群衆の賞賛のために、欠乏と訓練の修養に甘んじ、弱めるような放縦を自ら一切断つ。そうであれば、不死と高き天の賞賛の希望のうちにクリスチャン競技で走っている人々は、自ら進んで否定すべきである。道徳を墮落させ、知性を弱め、高い能力を動物的な食欲や情欲に従わせてしまう不健康な刺激物や放縦を断つ。……熱烈な関心をもって、神と天使たちは、クリスチャンの競走に携わっている人々の自己否定と自己犠牲と苦闘の努力に注目している。……

神のみ言葉の条件に完全に応じ、均整のとれた思いと健康的な道徳心を持つために、身体的な活力と体の活動を守る責任を自覚しているすべての人々にとって、競技は不確かなものではない。彼らはみな賞を得て、朽ちることのない不死の栄光の冠を勝ち取り、かぶることができる。(教会への証 4 巻 34, 35)

研究 7

最後の出来事



分離

—Separation—

今回は「分離」という主題をもって、今日わたしたちの時代に起こる非常に重要な出来事について研究していきたいと思います。先月は「ふるい」、その中でも特に「まことの証人の率直な証によるふるい」について研究しました。それでは、ふるいによって生じる「分離」とは何でしょうか。英語の聖書では Separation と記されていますが、邦文の聖書にはこの言葉を区別（列王紀上 8:53）、離れ（ネヘミヤ 9:2、10:28、エズラ 10:11）、分け離し（ネヘミヤ 13:3）、隔てた（イザヤ 59:2）、分ける（マタイ 25:32）、聖別（使徒行伝 13:2）などと訳されています。

わたしたちの救い主イエスは、「わたしの父は農夫である」と言われましたが（ヨハネ 15:1）、農夫であられる天の御父は、「見よ、わたしは命じて、人がふるいで物をふるうように、わたしはイスラエルの家を万国民のうちでふるう。ひと粒も地に落ちることはない」と仰せになっています（アモス 9:9）。次の証を読んでみましょう。

「キリストの教えにおいてもそのとおりであった。未知のことが、既知のことによって説明された。人びとが一番よく知っている地上のことによって、神の真理が明らかにされた。…自然のものが霊的のものへの媒介となった。自然界のものや、聴衆の人生経験が、み言葉の真理に結びつけられた。このように、キリストのたとえば、自然界から霊的世界へと導き、人を神と一つにし、地を天と結合させる真理の鎖の環である」（キリストの実物教訓 1, 2）。

同様に、わたしたちは地上の農夫の働きを通して、「分離」の問題をはっきりと理解することができます。もしある農夫が収穫の時に畑に行って一日中ただふるう作業だけして、ふるい分けた後に、夕方すっかり麦と毒麦を同じ袋に入れておくとしたら、どうでしょうか。それが非常に愚かな行動であることはだれにとっても明白です。主イエスはわたしたちの天父が「農夫」であられるとはっきり言われました。わたしたちの天父は思慮深い農夫であられます。その天父のみ言葉を読んでみましょう。「あなたがたは耳を傾けて、わが声を聞くがよい。心してわが言葉を聞くがよい。種をまくために耕す者は絶えず耕すだろうか。彼は絶

えずその地をひらき、まぐわをもって土をならすだろうか。地のおもてを平らにしたならば、いのんどをまき、クミンをまき、小麦をうねに植え、大麦を定めた所に植え、スペルト麦をその境に植えないだろうか。これは彼の神が正しく、彼を導き教えられるからである。いのんどは麦こき板でこかない、クミンはその上に車輪をころがさない。いのんどを打つには棒を用い、クミンを打つにはさおを用いる。人はパン用の麦を打つとき砕くだろうか、否、それが砕けるまでいつまでも打つことをしない。馬をもってその上に車輪を引かせるとき、それを砕くことをしない。これもまた万軍の主から出ることである。その計りごとは驚くべく、その知恵はすぐれている」(イザヤ 28:23～29)。

1. 分離の絶対的必要性

「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。キリストとベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信となんの関係があるか。神の宮と偶像となんの一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、『わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう』」(コリント第二 6:14～16)。

世のはじめからあらゆる罪悪は、神によって禁じられた交わりから始まりました。神は前記のみ言葉の中で「不信者」、「不義」、「ベリアル」と結合することはできないと仰せになっています。では、彼らはどんな人たちなのでしょう。セツの子孫とカインの子孫は、両者ともアダムの子孫であり、兄弟でしたが、神は彼らが結合することを不法な交わりだとみなされました。ここで分離の唯一の目的は、神の御旨に従い、その戒めを守る純潔な民を保存するためであったことが、次のみ言葉を通してわかります。「去れよ、去れよ、そこを出て、汚れた物にさわるな。その中を出よ、主の器をになう者よ、おのれを清く保て」(イザヤ 52:11)。

2. 聖書歴史に示された分離

(1) セツの子孫とカインの子孫との間の分離(創世記 6:1～7) —「個人として」

「カインは、神ののろいを受けて父の家から離れた。…彼は、エデンの回復の約束を投げ打ち、罪ののろいのもとにある地上で、財産や快樂を求めるために主の前を去って行った。こうして、彼は、この世の神を礼拝する多くの人々の先頭に立ったのである。彼の子孫は、世俗的、物質的発展の面だけでは、すぐれた力量をあらわした。しかし、彼らは神のことは無関心で、人類に対する神の計画にはそむいていた。…アベルは羊飼いの生活を送って、天幕や仮り住居に住んでいた。そして、セツの子孫も、自分たちを、『地上では旅人であり寄留者』であるとみなして、『もっと良い、天にあるふるさと』を求めながら、同じ道を歩んだ(ヘブル 11:13、16)。しばらくの間、この二種類の人々は離れていた。…こ

うして離れているかぎり、「セツの子孫」は神の礼拝の純粋性を保っていた」（人類のあけぼの上巻 76, 77）。

(2) アブラハムの分離（創世記 12:1～4）—「個人として」

『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい』と、神はアブラハムに言われた（創世記 12:1）。神が、アブラハムを清いみ言葉の擁護者としての偉大な任務にふさわしい者とするためには、まず、アブラハムを、彼の青年時代の仲間から引き離さなければならなかった。親族や友人たちの感化は、主がそのしもべに与えようとした訓練を妨げるおそれがあった。…彼にとって、この地上で最も幸福な場所は、神が彼にしているようにお望みになるところであった。

アブラハムのように、今日も、なお、多くの人々が試みを受ける。彼らは、天から直接語られる神の声を聞かないが、神は、神のみ言葉の教訓と摂理のできごとによって彼らを召される。富と栄誉を約束する職業を捨てて、気の合った有益な仲間を離れ、親族と別れ、克己と困難と犠牲だけを要求するように思われる道に進むように要求されるであろう。神は、彼らに仕事をさせようとしておられる。しかし、安易な生活、友人や親族の感化は、その働きを完成するのに必要な品性の発達を妨げるのである」（人類のあけぼの上巻 122, 124）。

(3) シナイ山での分離（出エジプト 32:26）—「組織された民として」

『宿営の門に立って、モーセは人々に呼びかけた。『すべて主につく者はわたしのもとにきなさい。』反逆に参加しなかった者は、モーセの右に立ち、反逆はしたが悔い改めた者は左に立つことになった。命令は遂行された。レビの子たちは偶像礼拝に参加しなかったことが判明した。他の部族の中にも罪を犯したものの、いまや悔い改めを示す者が多くあった』（人類のあけぼの上巻 379〔一線部脱落〕）。

(4) バビロン捕囚の後—「組織された民として」

「神は、『彼らとなんの契約をもしてはならない』と仰せになった。そして、このたび神の神殿の廃虚の前に築かれた祭壇において、主に再び献身を誓った人々は、神の民と世俗との間には、つねにはっきりした区別がなければならないことを自覚したのである。彼らは神の律法の要求するところを知っていると言いながら、それに従わない者たちと、同盟を結ぶことを拒否したのである。

イスラエルの教訓として申命記に示された原則は、神の民が終末に至るまで従わなければならないものである。真の繁栄は、われわれが神との契約関係を持続することにあるのである。われわれは神を恐れない人々と同盟を結んで、原則を曲げることはできない。

キリスト者であると公言する者が世俗の人々に影響を及ぼすためには、ある点

まで世俗と妥協しなければならないと考える危険が常にある。しかしそのような行動は、大きな利益をもたらすように思われるが、それは常に霊的損失に終わるのである。真理の敵はへつらいによってわれわれを誘い、取り込もうとしてあらゆる陰險な手段を用いてくるから、神の民は厳重に警戒していなければならない。彼らはこの世界においては、危険に満ちた道を旅する旅人であり、寄留者である。彼らは、忠誠の道からそらそうとして向けられる、巧妙な口実や魅惑的な誘惑に心を引かれてはならない」(国と指導者下巻 176, 177)。

(5) キリストの時代における分離—「組織された教会として」

「キリストの時代に人類の光と生命が、教会当局によって拒否されたように、それはつづく各時代においても拒否された。キリストがユダヤからしりぞかれた歴史は、幾度もくりかえされた。宗教改革者たちが神のみ言葉を説いたとき、彼らは、国教会から分離する考えはなかった。しかし宗教界の指導者たちが、光に対して寛容な態度を示そうとしなかったので、光を持った人たちは、真理にあらがれている他の階級の人たちをさがさねばならなかった。今日宗教改革者たちに従う者であることを自称している人々の中には、彼らの精神に生きている者が少ない。神のみ声をもとめて耳をかたむけ、真理がどんな形で示されようと、それを受け入れる用意のできている人は少ない。宗教改革者たちの足跡に従う者たちは、神のみ言葉のはっきりした教えを宣言するために愛する教会から離れなければならない場合がたびたびある。また光を求めている人たちは、神に服従するためにこの同じ教えによってやむなく父祖たちの教会から離れなければならないことが幾度もある」(各時代の希望上巻 285)。

(6) スミルナ、ペルガモ時代の分離

「長期にわたった激しい戦いの後、忠実なわずかの者たちは、教会が虚偽と偶像礼拝とを捨てることをなお拒否するならば、背信した教会との一致をすべて絶つ決心をした。彼らは、神のみ言葉に従おうとするならば、分離することが絶対に必要なことを認めた。彼らは、自分たちの魂を危険に陥れる誤りを黙認したり、自分たちの子孫の信仰を危うくするような例を残したりすることはしたくなかった。彼らは、神に対する忠誠と矛盾しないかぎり、どんな譲歩でもして、平和と一致を保とうとした。しかし、平和のために原則を犠牲にすることは、あまりにも大きな代価であった。真理と正義を曲げなければ得られない一致であるならば、彼らはむしろ不和をも、そして戦争をもいとわなかった。

これらの人々を堅く立たせた諸原則が、神の民と称している人々の心の中によりみがえるならば、教会と世界にとってどんなにかよいことであろう。キリスト教信仰の柱である教理が、驚くほど無視されている。結局こうしたことは重大なものではない、という意見が強くなっている…。

初代のキリスト者たちは、実際、特殊な民であった。彼らの非難するところのない行状と確固たる信仰とは、絶えず罪人の心を責めるものであった。彼らは数が少なく、富も地位も名誉ある称号もなかったけれども、その品性と教義とが知られているところではどこでも、悪を行なう者たちにとって恐怖であった」（各時代の大争闘上巻 38, 39）。

(7) 再臨運動当時の分離

「彼らは自分たちの教会を愛しており、それから離れることをきらったが、神の言葉の証が圧迫され、預言を研究する権利が拒否されるのを見たときに、神に忠誠を尽くそうとすれば、服従することはできなかった。彼らは、神の言葉の証を閉め出そうとする人々を、キリストの教会を構成するもの、『真理の柱であり基礎』をなすものと見なすことはできなかった。そこで彼らは、従来の関係から分離することが正しいと考えた。1844年の夏、約5万人が教会から脱会した」（各時代の大争闘下巻 76）。

(8) 第三天使の使命を信じると公言している人たちからの分離

「あらしが迫って来るとき（迫って来るとい言葉に気をつけてください）、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰を捨てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっていく。そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般うけのする側を選ぶのである」（各時代の大争闘下巻 378）。

(9) 最後の分離（黙示録 18:4）

「わたしは、神が、名目的再臨信徒たちと、墮落した教会の中に、心の正しい人々を持っておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が、下される前に、これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大なる叫びがあがる前に、サタンは、これらの宗教団体に、興奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人は皆、墮落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである」（初代文集 424, 425）。

3. エジプトとバビロンからの分離

(1) エジプトから

「イスラエル人は、奴隷になっている間に、神の律法の知識をかなり見失い、

その戒めから離れていた。安息日は、一般に無視され、作業を監督する者が不当に彼らを働かせたので、安息日を守ることは一見不可能に見えた。しかし、モーセは、神に従うことが救いの第一条件であることを、神の民に明らかに示した。こうして彼らが、再び安息日を守ろうとしていることが、圧制者たちに知られるようになった」(人類のあけぼの上巻 294)。

「異国に移住することに付随した困難に会うよりは、奴隷のままにいたほうがよいと思う者が多かった。また、エジプト人の生活になじんでしまった者は、エジプトに定住することを選んだ。…もし多くのイスラエル人が、これほどまでに墮落せず、また、エジプトを離れることをきらわなかったならば、モーセの働きは、はるかにやさしかったことであろう」(同上 298)。

わたしたちは前記の証を通して、エジプトにおけるイスラエルの人々の状態を理解することができます。神がイスラエルの人々をエジプトから分離しようとなさったのは、踏みじられたご自分の律法(特に安息日遵守に関する第四条の戒め)をご自分の民の中に回復するためでした。しかし、このメッセージがイスラエルの人々に与えられたとき、彼らの反応はどうだったでしょうか。「エジプト人の生活になじんでしまった者は、エジプトに定住することを選んだ」と預言の霊は証しています。「もし多くのイスラエル人が、これほどまでに墮落せず、また、エジプトを離れることをきらわなかったならば、…」という証は、わたしたちにどんな感銘を与えるでしょうか。今日神の律法を犯している人々へ、彼らの感化から離れよというメッセージが与えられるとき、わたしたちはどんな態度でこのメッセージを受け入れるでしょうか。神があらゆる御摂理を通して、わたしたちを神に仕える最善の道に導こうとなさるとき、そのみ声に対して何の不満や疑問もなく従うことが真のキリスト者の態度であることを、次の証が明らかにしています。

「ここに教えられている驚くべき教訓は、いつの時代にも当てはまるのである。クリスチャンの生涯は、しばしば危険にさらされ、義務を果たすことが困難に思われる。われわれは、前方には滅び、後方には束縛や死が迫っているように考える。それにもかかわらず、神のみ声は明らかに『前進せよ』と言っている。われわれの目が、暗黒を貫いて見るができなくても、また、冷たい波を足もとに感じて、われわれはこの命令に従わなくてはならない。われわれの前進を妨げる障害物は、ためらったり疑ったりしては取り去られることはない。すべての不安のかげが消えうせ、失敗や敗北の危険が全くなくなるまで服従をのぼすものは、絶対に服従することはない。『障害物が取り除かれて、われわれの道が明らかに見えるようになるまで待とう』と不信はさきやく。しかし、信仰はすべてを望み、すべてを信じておしく前進することを勧める。…神がお導きになる道は、荒野や海を通っているかも知れないが、安全な道なのである」(人類のあけぼの上巻 334)。

(2) バビロンから

「エズラは大多数の者がエルサレムに帰還することを期待していたが、応答した者の数は意外に少なかった。家や土地を手に入れていた多くの者は、それを犠牲にすることを望まなかった。彼らは安楽と慰安を愛し、残留することに十分満足していた。こうした行動は、さもなければ信仰をもって前進した人々と運命を共にすることを選んだであろう、他の人々に対する妨害となったのである。

エズラは集まった一行の人々を見渡したときに、レビの子孫が一人もいなかったのを見て驚いた。神の聖なる務めのために聖別された部族の人々は、いったいどこにいたのであろうか。主につく者はだれかという召しに対して、レビ人は真つ先に応答するはずであった。…

王と諸侯たちは、帰還の道を開くのに彼らのなすべき分以上のことをしたのである。彼らはあり余るほどの財産を準備したのであるが、人々はいったいどこにいたのであろうか。レビの子孫は兄弟たちといっしょに行く決心をして、他の人々にも彼らの模範に従うように促すべき時に当たって、何もなかった。この不思議な無関心は、民のための神のみこころに対して、バビロンのイスラエル人がどんな態度をとったかを、悲しくも表しているのである。エズラはもう一度レビ人に訴え、彼の一行に加わるように緊急招待を発したのである」(国と指導者下巻 214～217)。

今日も、神の律法を踏みにじり、その重要性を認識せず、民に律法を教えない人々から分離せよというメッセージが引き続いて聞こえて来ます。「去れよ、去れよ、そこを出て、汚れた物にさわるな。その中を出よ、主の器をになう者よ、おのれを清く保て」(イザヤ 52:11)。では、今日、霊的バビロンとはどこでしょうか。「…その誤りと罪のために、また、天からの真理を拒んだために倒れた教会である、ということを知って、彼らは驚くのである」(各時代の争闘下巻 376)。「バビロンを構成する諸教会は、霊的暗黒と神からの離反に陥っているにもかかわらず、その中にはまだ、真のキリスト者が数多くいる。この時代のための特別な使命をまだ悟っていない人々が多くいる。自分たちの現状に満足せず、もっと明らかな光を待ち望んでいる者が、少なくない。彼らは自分達の所属する教会の中に、キリストの姿を見ようとしても見ることができない。こうした諸教会が、真理からますます遠く離れ、世俗といっそう密接に結合するにつれて、二つのグループの人々の相違は大きくなり、ついには分離しなければならなくなる。この上なく神を愛する人々は、『神よりも快樂を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者』たちとは、もはや関係を保つことができなくなる時が来る。…『真理を信じないで不義を喜んでいた』人々は、偽りを信じ、惑わす力に陥るままにされる(テサロニケ第二 2:12)。そのとき、真理の光は、それを受けようと心を開くすべての人の上に輝き、バビロンに残っている主の子供たちはみな、「わたしの民よ。彼女から離れ去れ」という招きの声に耳を傾けるのである(黙示録 18:4)」(各時

代の大争闘下巻 92、93)。

4. 罪と罪人からの分離

「奴隷たちは、自由を得るに先立って、間もなく成就されようとしている大いなる解放を信じていることを表さなければならなかった。血のしるしを彼らの家に塗り、彼らとその家族はエジプト人から離れて、それぞれの家の中に集まっていなければならなかった。…彼らが、必要なことをことごとくすませていると心から思っていたとしても、ただ真剣にそう思っただけでは救われなかったのである。…

イスラエルの人々は、従順によって彼らの信仰の証拠を示さなければならなかった。そのように、キリストの血の功績によって救われようと望んでいる者は、みな救いを得るために、自分でもしなければならぬことがあるのを知るべきである。罪の刑罰からわれわれを贖うことができるのはキリストだけである。しかし、われわれも罪から離れて服従しなければならない。…神は、御子を…お与えになり、真理の光、すなわち生命の道を明らかにされた。そして必要なでたと、さだめと、特権をお与えになった。そこで人間もこうした救いの方法と力を合わせなければならぬ。神がお備えになった助けを感謝して活用し、神のご要求をことごとく信じ、それに従わなければならない」(人類のあけぼの上巻 320、321)。

わたしたちは上記の証から、「分離」とは神のご自分の民に対するご要求の一つであることを理解しなければなりません。よく聞かれる「どこにいても、わたしだけ忠実であればかまわない」という言葉に対して、預言の霊は次のように証しています。「天使は罪と罪人から分離したすべての者の額にしるしをつけ、また滅ぼす天使が続いて老若共に完全に滅ぼすであろう」(教会への証 5巻 505)。

5. 分離を通して現される愛

神はイスラエルの人々をエジプトに置いたままご自分を礼拝するようにはおできにならなかったのでしょうか。なぜ必ず他のところに出て行って分離しなければ、ご自分の選民とすることがおできにならなかったのでしょうか。神の民はバビロンの中で神を礼拝できないのでしょうか。なぜ神の律法を犯している(また軽視している)人々から分離しなければならないのでしょうか。どこから分離し、だれが出てこなければならないのでしょうか。また、それはなぜでしょうか。

「わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ』」(黙示録 18:4)。

「わたしは、神が、名目的再臨信徒たちと、墮落した教会の中に、心の正しい人々を持っておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が、下される前に、

これらの教会から呼び出されて、喜んで真理を受け入れることをわたしは見た。サタンは、この事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタンは、これらの宗教団体に、興奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人は皆、墮落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである」(初代文集 424, 425)。

上記の預言の霊を通してはっきり示された幾つかの重要点を要約してみましょう。

- (1) 呼び出す声はどこから来るか。…天(黙示録 18:4)。
- (2) だれを呼び出すか。…わたしの民(神の民)。
- (3) どこから呼び出すか。…名目的再臨信徒たちと、墮落した教会。
- (4) 呼び出す理由は何か。…その罪にあずからないよう、またその災害に巻き込まれないようにするため。
- (5) この事件はいつ起こるか。…災害が下される前に(恵みの期間が終わる前)。
- (6) サタンはいつ、どんなことをするか。…第三天使の大いなる叫びがあがる前にサタンは、心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。
- (7) みながこの惑わしに惑わされるか。…光が輝き出る。そして、心の正しい人は皆、墮落した諸教会を去る。
- (8) この心の正しい人はどこに行くか。…残りの民のところに行く。
- (9) 残りの民とはだれか。…イエスを信じる信仰によって神の戒めを守り、イエスの証を持っている者たち(黙示録 14:12、12:17)。

「だから、『彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受け入れよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。』全能の主が、こう言われる」(コリント第二 6:17, 18)。

「わたしたちは世の人と異なっていなければならない。なぜならば神がご自分の印をわたしたちに押し、ご自身の愛の品性をわたしたちの身にあらわされるからである」(ミストリー・オブ・ヒーリング 18)。

昔、イスラエルを「わたしの長子」(出エジプト 4:22)と仰せになった神は、今日まことの証人の証を通して、初穂(14万4千人)を呼び集めておられます。罪と罪人から分離する者に、神がご自分の印を押しおられる今、お一人お一人がその招きに応じて、残りの民に加えられますようにと切に願っております。

(50 ページの続き)

記下 5:1 ~ 4)

物語は続き、神様がどのようにナアマン將軍を預言者エリシャをとおしていやして下さったかをおしえています。ふつう、らい病はいやすことのできない病気でしたから、まさにこれは奇跡でした。そしてもし小さな女の子がナアマンとその家族の心に信仰をふきこまなければ、ナアマンはたすけられることはなかったはずです。

イエス様はのちにこのことがどれほど特別なことであったかをのべられました。「また預言者エリシャの時代に、イスラエルには多くのらい病人がいたのに、そのうちのひとりもきよめられないで、ただシリアのナアマンだけがきよめられた」(ルカ 4:27)。

そうです、小さな女の子は、とらえられて悲しい思いをしましたが、そこからよい結果がうまれました。そしてそのよい結果は、女の子が自分の状況を取りあつた方法によるところが大きかったのです。ナアマンに対しておこるかわりに、どれほど彼も苦しんでいるかを考えて、たすけてあげたいと思いました。

「心に憂いがあればその人をかがませる、しかし親切な言葉はその人を喜ばせる」(箴言 12:25)。

よい模範になる決心をしようではありませんか。わたしたちにとってつらいときでも、親切(しんせつ)になり、ほかの人々により言葉をかけましょう。神様がそこから、いつか奇跡をおこそうと思われるかもしれないのですから!

チャプチェー韓国風はるさめー

〔材料〕

| | |
|------------|------|
| 韓国はるさめ | 250g |
| にんにく | 2片 |
| にんじん | 1/4本 |
| たまねぎ | 1/2個 |
| ほうれん草 | 1束 |
| 水煮ぜんまい | 100g |
| しいたけ | 3個 |
| 油あげ | 1/2枚 |
| はちみつ | 大さじ2 |
| しょう油 | 大さじ3 |
| 塩 | 大さじ1 |
| 昆布だし(粉末) 1 | 小さじ1 |
| ごま油 | 大さじ3 |
| ごま | 適量 |

〔作り方〕

1. 野菜の材料をそれぞれ千切りにします。
2. ほうれん草をゆがき、よく水通しし、4cmくらいに切ります。
3. あらたに湯をわかし、ぜんまいもよくゆがいて水洗いし、4cmくらいに切ります。
4. 油あげの油抜きをし、5mmくらいに切ってフライパンでよく乾かします。
5. にんじん、たまねぎ、しいたけ、ゆでたぜんまいを、一 종류ずつ少量の油で炒めます。火が通るくらいでとめ、固めにしゃきっと歯ざわりを残すのがポイントです。
6. はるさめをゆでます。5分くらい、固めにゆでて、ざるに開け、水をよく切ったら、大きめのバットにあげて、ごま油をよくまぶします。
7. 野菜をすべてバットに入れ、さらににんにくを軽くつぶして、あらく切っけて入れます。
8. 調味料をぜんぶ合わせて、よくまぜます。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。



書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



女の子 と 奇跡(きせき)

「あなたは、年が若いために人に軽んじられてはならない。
むしろ、言葉にも、行状にも、愛(あい)にも、信仰(しんこう)にも、
純潔にも、信者の模範(もはん)になりなさい。」(テモテ第一 4:12)

ああなたは、まだ子どものうちに、どうやったら神様のための伝道者
になれるだろうかと考えたことがありますか？

聖書には、スリヤの軍勢(ぐんぜい)にとらえられたイスラエルの小さな女の子の興味(きょうみ)ぶかいお話があります。とらえられるのは、あまり楽しいことではないですよ。しかし、このどれいの女の子はたいへんな状況の中で最善(さいぜん)をつくそうと決心したにちがいありません。女の子は自分がはたらいていた家庭でよい模範をのこしました。なぜなら、そこの人々は、彼女の言ったことを信じたからです。このことについて、読んでみましょう。

「スリヤ王の軍勢の長ナアマンはその主君に重んじられた有力な人であった。主がかつて彼を用いてスリヤに勝利(しょうり)を得させられたからである。彼は大勇士であったが、らい病をわずらっていた。さきにスリヤびとが略奪隊を組んで出てきたとき、イスラエルの地からひとりの少女を捕(とら)えて行った。彼女はナアマンの妻に仕(つか)えたが、その女主人にむかって、『ああ、御主人がサマリヤにいる預言者(よげんしゃ)と共におられたらよかったですでしょうに。彼はそのらい病をいやしたことでしょう』と言ったので、ナアマンは行って、その主君に、『イスラエルの地からきた娘(むすめ)がこういう事を言いました』と告げ」(列王